
臍 (ほぞ)

ケニーD

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
臍ほぞ

【Nコード】
N3177P

【作者名】
ケニーD

【あらすじ】
あの時あっていたなら自分の人生はもっと変わっていたかもしれない。人は誰しも過去に戻りたい時がある。交通事故で過去へタイムスリップした主人公が、自分の人生を変えるべく実の父を殺し、父として成り代わり、小さかった頃の自分を自らが育てていく。運命に対する、「運命の叛逆」の物語。

枯れた夜景の見える窓に、もう一人の私が映っている。いや、「もう一人」という言い方はおかしいか、と思い直しながら視線を戻し、パソコンの電源が落ちるのを見届けたあと、背もたれに深く身体を預けた。目を閉じて大きく息を吐き、仕事の終わりを少しでも喜び、帰り支度を始める。こぢんまりとした個人事務所。誰に挨拶する必要もない。私は静かに灯りのスイッチを切った。

施錠をしてエレベーターで一階へ降り、エントランスから表へ出ると、多くの人々が喧騒の中を今日もかわらず行き交っている。ほとんど無表情な人間ばかりだが、それらの中には、仲間に対し澁刺とした笑顔を浮かべている者もあり、そこに楽し気な笑い声など混ざろうものなら、私は世間に引け目を感じ、申し訳なく思うのだった。

駅まで歩き、電車で五駅。降りてすぐにあるコンビニで夕食を買い、店員に向かっては、「はい」とだけ返事をする。楽しみも何もない、ただ質素な、そして静かな暮らし。満足も不満もなく毎日を過ごしている。いや、私はもう、ただ全てを諦めているのだろう。

いつもと変わらぬ帰路、交差点。この赤信号を渡って少し行けば、私の住むマンションがある。しかし、そこへは辿り着けなかった。赤信号を認識しておきながら、車の流れを少量とはいえ認識しておきながら、横断歩道を数歩進んで我に返って右を見たとき、真正面、口と双眸を大きく開いて驚く運転手と目が合った。

私は、私の人生の、いったい何を変えたかったのだろう――。

目を覚ましたのは、病院のベッドの上だった。夜なのか、灯りは消えている。

体は重く、痛みもあったが、骨が折れているような実感はなく、身体は容易に起こせた。自分を見れば、淡い青の患者衣を着せられている。

確か、そう、事故にあって、それから――、そうか、それでここにいるのか。いったい、どれくらい日が続いているのだろう、今は何日なのか、とベッドを仕切っているカーテンをあけて辺りを見回すと、窓の外に星明りが見え、正面では、カーテンの向こうに誰かいるらしかったが、寝ているのだと思い、とにかく現状の確認を急ごうと静かに病室を出て、ナースステーションを目指した。

リノリウムの廊下が、ほのかな明かりを反射している。遠くに明かりの漏れる窓が確認できたので、そこに看護師がいるだろうと思い、向かった。

すみません、と声をかけると、若い看護師が振り返り、やや驚いたような表情を見せてから、「お体は大丈夫ですか？」と聞いてきたので、「ええ。それより、私はどれくらい眠っていたのでしょうか、いま、何月の何日ですか」とやや焦り気味に問うた。

「十月二十四日です。運ばれてからちょうど一日ですが……」

看護師は何か言いたそうにしていたが、私は安堵すると同時に仕事のことが気になり、といっても、任されたことをやっているだけでそうそう連絡が来るものでもないのだが、一日開けてしまったことに対しての謝罪と事故にあったことを説明する必要を感じ、携帯電話を含めた所持品がどこにあるかを尋ねた。

「携帯？……電話……はちよつと……、所持品はこちらでお待ちしていますものと、ベッド脇のロッカーにしまっているものがあります。少々お待ちください」

そう言って看護師はナースステーションの奥へ引っ込み、ロッカーを開けてかごを持ってきた。

鞆。その中に、財布、携帯電話、煙草、ライター、書類。

すべて私の持ち物だ。携帯電話もきちんとある。着信はゼロ、圏外。画面に表示されてある時刻は二十四時をほんの少し過ぎていた。

別の場所なら電波も通るだろうと、喫煙所の場所を尋ねる。ついでに煙草も吸いたかった。

「一階ですが、あの、柳さん、どうか安静にしてください」

「柳……ああそうですね、大丈夫ですよ。痛いのは背中と腕くらいなものだし、精密検査も必要なさそうだ。それともう済んでるんですかね。一服したら戻ってきます。加害者の話も聞きたいですし」

と、自分の患者衣に気づき、先に着替えようと、服のしまわれている場所を尋ねた。

「病室のロッカーにかけてます」

おどおどした表情でまだなにか言いたげだったが、私は返事もせずに元来た道に戻る。夜の病棟の静けさに新鮮味を感じつつ部屋に入りロッカーをあけ、服が破れていないかを確認した。幸い、どこも破れておらず、それほど破れか大して汚れも付着していない。どのような事故だったか、はつきりとは思いつけないが、この程度で済んでいるということは幸運だったのかもしれない。

エレベーターで一階へ降り、案内の標識を頼りに喫煙所を探す。パジャマ姿で手に煙草の箱を持っている中年の男がいたので、目的は同じだろうとあとをつけた。電波はまだ入らないようだ。

喫煙所は予想に反した造りだった。よくあるガラス張りの、隔離された見世物小屋ではなく、待合用にくつも並べられた、背もたれのない黒いベンチソファの端に、灰皿が数本そえられていて、この病院は非喫煙者にあまり配慮していないのだな、と不思議な感じがした。

老人、中年の男女が計八人ほどおり、一人でくつろいでいたり、談笑したりしているが、空間は静かなものだった。表情からは、入院している彼らの病状、その深刻さまではわからない。

ここでも電波が入らないことを確認し、私は少々苛苛しながら、まあ病院では携帯電話を使わないほうがいいだろうと思い直し、外で煙草を吸いながらでいいか、と考えた。夜の病院は怖いものだとばかり思っていたが、入院患者連の、病苦のない憩いを垣間見ると、

なかなかどうして楽しくもあった。それは、単純に、普段見られないものを見られたからだろうか。

夜間用の出入り口から表へ出ると、冷たい風が向かえた。携帯の液晶画面を見ながら電波を探り歩く。一見して、人里離れた山奥というわけでもないのに、まったく電波を受信する気配を見せない。ちくしょう。そう一人ごち、ここはいつたいどこなんだ、と辺りを見回して、病院全体を見上げたとき、なにか、ただならぬ、いや、不思議な違和を感じたのだった。

ここは、どこだろう。覚えはある。この風景にも。しかし……。ふつ、と、子供時代の画がフラッシュバックした。小さな私と、母と、病院。

まさか、これは、なぜ……なぜ……、ありえない。馬鹿な、なんなんだ。この場所は、この病院は……私が、子供のころに、ああ……、老朽化で取り壊され、移転したんだ……。だから、もう、ここに在るわけがない……。それに、私は、帰宅途中に事故にあったんだぞ。それがなんでこんな故郷まで！

私は恐怖で気がどうにかなりそうだった。数年間、常に冷静でほぼ無感動だった自分の心が、痒くざわついているのがわかる。

ここは似たような場所というだけではないのか、とあわてて住所を標識で確認する。しかし、無意味なことだった。まぎれもないあの場所。子供のころに住んでいた場所だった。

なら、これは夢なのだろうか。いや、今まで摩訶不思議、支離滅裂な夢は何度も見た。しかし、一度として、これは夢なのだろうかなどと、まるで水に溶けて薄らぐ写真のような朧の中で思ったことはなく、目覚めてから安堵するのみだった。

今、話が脈絡なくすっ飛ばす様子もないこと、そして幾千もの落ち葉、やわらかな風、月明かり、それに照らされるかすれた雲。そのどれを見ても、一つ一つに少しの感慨を持てること、こんなことは夢では体験したこともない。だとするなら、ここはあの世なのか。私はあの事故で、両親と同じように無残に死に、閻魔の悪戯で弄ば

れているのだろうか。

ふと、上着のポケットに入っている煙草に気づいた。そう、私は冷静でなければならなかった。黄色いパッケージに入っているアメリカンスピリットを一本取り出し、すぐ消えないように長めに火をつけ、ゆっくりと、多めに煙を口に入れ、味わってから吐き出した。煙草をゆっくりと味わうこの余裕が必要なんだ。

何度か肺に入れた後、冷たい手を軽くさすりながら、今、何をすべきかを考えた。

とりあえず、病院に戻るわけには行かない。保険証の事を聞かれた時の答えなどないように思えたからだ。そして重要なのは、これを取りあえず現実だと考えるとして、何年なのかということ。なぜなら、この病院が取り壊されたのが小学生時代のこと、両親は私が幼稚園に通っているときに事故死した。この病院があるということは、両親の生き死にの瀬戸際かもしれなかったからだ。

両親の死後、私は近所に住む親戚の家に預けられ、高校までを過ごした。愛情のようなものは感じられず、ただお世話になった恩があるだけだと思っている。しかし、寂しいだとか、誰かそばにいてほしいなどと思ったことはない。それはおそらく、私自身の性格なのだろう。愛情欠落者として、日々それを求めるような人生でなくてよかったとは、ほんの少しだけ思う――。しかし、そのことで失ったものも多いだろう。

辺りをうかがい、病院から遠ざかりながら人を探す。しかし一体、どのようにして聞けばいいのだろう。現代の、いや、未来と言うべきなのか？ とにかく、ここへくる前の時代、世界なら、二十四時間営業のコンビニがあって、雑誌の発行データを見れば済むところだが、幼少時代、コンビニなんていう便利なものは近隣にはなかった。ここからなら、家まで歩いて二三十分といったところか。その道すがら、情報を集めればいい、と考えた。最後の煙で肺を満たし、地面に落とした紙巻を踏み潰す――。

数分歩いたが、こんな深夜に出歩いている者は当然少なく、いた

としても、夜に声をかけるのは避けたほうがいいかもしれない。では、交番に行くのはいかがでしょうか。普通に暦などを聞けば不審者だろう。だからといって、怪しまれないように酔っ払いのフリをして尋ねる小芝居なんて、自分自身が恥ずかしくてできるわけがなかった。

暗い町並みを眺めながら歩く。どれもこれもが懐かしく、次第に、今が正確にいつであろうとどうでもよくなり、この町を出た十八の時の景色と、幼少のころの景色との違いに、時の無常と、錆びた鉄の爪で行われた人工的な無常、その変容に対して、小さな怒りを思い出し、また、内心で感涙し、この世界を大人になって、ここでのようにありありと見られたこと、その未知への感謝と疑問と畏怖とが入り混じって、私を立ち止まらせた。

この町は、寒かった。

私は体を少し震わせて、ショルダーバッグをかけなおし、両手上着のポケットへしまった。

立ち止まったまま、ぼうっと考えた。年を知って何をしようというのか、家へ行って何をしようというのか。それよりも私は、元いた場所へ戻る方法を見つけないのではないのか。いや、正直に言う、さっきも考えたように、これは夢のようなものなのだろうと思っていた。もっと正確に言えば、このすべては深い場所に眠っていた記憶が作り出した幻で、事故のせいでこの世界を見て、そう、死の淵から戻った人たちの話す、あの三途の川のようなものなのだと、なんとなく、理解しているつもりだった。だから、見れるものなら幻であっても、両親に会いたかった。

きっと、本当の私は今、病室の集中治療室かどこかで昏睡状態なのだろう。

しかし、結論付けるのはあとだ。年代がはっきりして、家族の歴史に合致するよう矛盾なく彼等が生活しているのなら、信じがたいことではあるが、もしかすると本当に過去に來ている、ということ

だって考えられるのだから。

今は家へ向かう。そうするのみなのだ。

住宅街に入った。ところどころの家庭で灯りがついている。あと十分も歩けば、あの家が見えてくるはずだ。それまでに、せめて年代だけでも知っておきたい。

ふと、ある一軒家の玄関先に、新聞紙が結ばれて置かれているのを見た。おそらく、ゴミ捨ての準備をしているのだろう。当然、私はそれをありがたく頂戴し、誰にも見られていないことを確認すると、やや足早にその場を去り、街灯の下で小さく広げてみた。

昭和。昭和だった。昭和五十五年、十月二十二日。私は口元を片手で覆い、少し考えた後も、これは何かの間違いじゃないのか、と信じられずにいた。記事をあさる。経済面も政治面も十月近辺のことしか書いていない。二〇一〇年のことなどどこにもなかった。

—————いいだろう、なら私は、とりあえずそれを認めよう。そして、今生きている両親に会い、事故を回避させるのだ。父は三十三歳、母も同じか。私よりも二つも若いのだな、と複雑な心境だった。

これは何の因果だろうか、命日は三日後、確か土曜日だったはずだ。なぜ、深夜に二人で車に乗っていたのかは知らない。五歳だった私が知る由もない。海岸通りを走行中、ハンドル操作を誤って中央線からはみ出してきた速度超過の対向車に衝突され、相手のドライバーを含めた三人ともが亡くなった。場所はここからすぐ近くの海岸通りだ。私は何度も現場に献花した。枯れた花を何度も見た。そうだ、今この時間、家を訪問してなんと言うつもりだったのだろう。私はあなたたちの息子だ、とでも？ 通用するわけがない。時間的にも非常識だろう。

私は朝を待つことにし、そのときまでに挨拶と事故の危険を知らせる言葉を決めておき、とりあえず今はあの事故現場を見に行こうと思った。

ここからなら十五分ほどか。新聞を数枚だけ折りたたんで後ろポ

ケットに突っ込み、残りは先ほどの場所へ戻した。それから携帯を取り出し、おおよその時刻を確認して、煙草をさぐる。

「少し、腹が減ったか」

小さく呟いたあと、火をつけ、歩いた。この煙草はすぐ火が消える。一服二服したところで煙が肺を満たさなくなっていたことに気づくも、まあいいか、と火の消えた煙草をくわえたままにした。

潮の香りが微かに鼻腔をついた。ここ何年も、もう夜の海は見えない。あの、暗闇にたゆたう、万華鏡の海を。

しばらく行くと、穏やかな波の音も耳に入ってきた。海岸線の歩道から海を眺めながら歩く。時折吹く小さな風はやはり冷たかったが、心地は良かった。煙草に火をつけなおし、ゆっくりと煙を吐きながら水平線のほうを眺めた。左手の遠く、対岸に、船の灯りや、灯台の灯り、寝静まりかけた街の暖かな光が見える。ほんとうに小さな、街のそれが、今という時代をなんとなく、昭和なのだと思わせた。

この時間、交通量は無いに等しかったが、波の音と車の走る音が調和するのを一度だけ楽しめた。

見えてきたあの場所、急なカーブ。そこで曲がりそこねた車が両親を殺した。

今はもう、両親を亡くした悲しみなどはない。消えて、事故が事実として残っているだけだ。だが、助きたい。もしここがほんとうに過去なのだとして、助けることによって未来が変わってしまうのだとしても関係がなかった。

私はそのカーブを歩道に立ちながら見た。急とはいえ、スピードが出ていなければなんと言うこともないだろう。事実、今ここを走ったあの車は緩やかな弧を描いて綺麗に走り抜けて行ったのだからそれに、以降で事故の報告を聞いたこともなかった。憎しみを知らなかった私には、もはや、ただ運が悪かったとしか言いようがない。だが今は違う。会えるのだ。そのことを純粹に喜んだ。

どこか、夜を過ごせる場所を探そうと、光を求めて歩くことにし

た。元きた道を戻り、なら、タクシーでも拾おうかと考えた。ネットカフェでも在れば嬉しいのだが、この時代にそれを求めるのはナンセンスだ。思えば、不便な時代じゃないか。過去を見るならいつだろうと同じことかもしれないが――。

遠くから甲高い音が聞こえてきた。私がカーレースが好きだったり、もう少し若ければ、いい音だ、と喜んだかも知れなかったが、この歳になってから思うのは、やかましい、の一語に尽きる。いつを境にそう思うようになったのかはわからない。

私はあえて視線を送ることはせず歩いた。ヘッドライトが流すように道路を照らし去ったあと、後方でタイヤの鳴く音が聞こえた。直後に鉄の音。

思わず振り返った。

嫌な予感がした。今のは事故の音だ。

馬鹿な、三日後のはずだ……事故は三日後のはずだろ……。

はっと気づく。あの新聞が今日の日付だと、なぜそう思ったのだ。私は――。ああっ！一瞬、脱力感のようなものを味わったが、すぐさま走り出した。あの看護婦は……、確かに私は訊ねた！なぜそれを……。混乱しているのか？私が？私が？

音のした場所を目にした私は、思わず叫んだ。

嘘だっ！

私の思い描いていた静かな感動の再会が……、こんな、こんな形で！　しかしまだだ、まだわからない。すぐに救急車を呼べば助かるかもしれないのだ。とにかく早く確認しなければ、と急いで駆け寄った。

きれいに正面衝突したようで、父の車はフロントがぐしゃぐしゃに潰れていた。暗闇の中、車内に二人の影が見える。

「おいっ！」

運転席のドア側から声をかけた。母は奥で動いていなかったが、父は頭から血を流して苦しそうに、そして弱弱しく呻いていた。

「今たすけ……」

私に似ている気もする父を見て思う。この人は、もう助からないんじゃないのか？

とその時、自分でも瞬間には理解しがたい考えが脳裏をよぎった。それは、今この時代にいる小さな私のことだ。

彼に、同じ人生を、私と同じ人生を歩ませたくはなかった。この事故のあとと同じ道をたどるはずだ。だから、それを変えてやりたい、私が、彼を育てられないだろうか、ということ。もちろん、それで私自身の人生が変わるわけではないということはわかる。それに、夢ならいつか覚めるのかもしれないと思う。しかし、私は少しずつ、この世界を認めてしまっているようだった――。

何ものもなかった。人も、物も、喜びも。私がただそこで生きていただけだ。もう一人の私には、もう少しましな人生を歩んでほしい。私はやはり、寂しかったのかもしれない。車内の二人には申し訳ないと思うと同時に、この瞬間に立ち会えた運命に感謝する。

親戚には預けない。あなたたちの代わりに私が責任を持って育てさせてもらう。そのために、私があなたと入れ替わる……。

私は少し、自分が恐ろしかった。しかし、やるのなら、一刻の猶豫も許されない。私が成り代わらなければならないのだから、父を隠す必要がある。きつともう、父は助からない。できるだろうか。許されるだろうか。

私は、私よりも若い父を眺め、内心で許しを乞い、ゆっくりと呼吸を整えた。

どこへ隠す？ 海か。いや、いきなり海へ捨てるわけにはいいかな。トランクはどうか。この損傷度合いだとレッカーで持っていけるだろう。そのあと、うまくやれるとは思えない。きっと見つかる。

「た、助けてくれ……」

父の小さな声だ。伸ばそうとしている腕の動きは力なく、私の手をつかむに至らない。その腕でもっと、私を抱きかかえてほしかった。きつとこれが本心なのだろう。

目を閉じ、ゆっくりと息を吐き、それから気を入れた。

しかし、冷たいかもしれないが、こりゃあもう完全に駄目だな、
と思った。いや、思うことにした。

「動かずに黙って」

私は、あなたを隠す方法を考えなければならないのだ。

まず、私は車内を探り、身分証を探し、隙間からそれを見つけると、父の財布ごと自分のポケットへ入れた。車のキーからは、ホルダーにぶら下がっている家の鍵だけを抜き取った。彼は朦朧とした意識でなにやら言っていたが、もう、なにかをする力もないようだった。

このままでは、じきに通る車から人が駆けつけてくるだろう。そうなければ完全に終わる。どうすればいい、考えろ。考えるんだ。

利用できそうなものがあるか、辺りをうかがう。しかし大きな箱や陰になりそうなものは何もない。

くそっ！ この事故の衝撃で父だけが私と同じように消えてくれているのなら！

しかしそれだと、重要な身分証は手に入れられなかっただろう。そんな神がかり的なことに期待するよりも、今、自分で何とかすることを考えるんだ。

とその時、視界にゆらめく光が入った。よく見ると、もう一台のフロントから火と煙が生じていたのだ。私はありがたかった。すぐさま父を引き摺り下ろし、火が大きくなる前に相手の助手席へととなんとか運びいれ、余計なものがポケットに入っていないかを確認し、全焼してくれることを願った。これは火葬だ。

燃える様子を逐一確認しつつ、父の車の運転席へつく。母の顔はぼろぼろで見るに耐えなかった。だが、感傷に浸る暇はない。私は割れたフロントガラスを握り、覚悟を決めて自分の頬と額を二度ずつ割った。流血させて事故の被害者を装うのと同時に、顔と表情を隠す化粧のつもりだった。

火は、どんどん大きくなる。車両火災で、体が完全に燃えてくれ

るのかはわからない。DNA鑑定や歯型でバレるのかもしれない。そう思うと、とたんに不安になった。だが、きつと、この時代がそれを助けてくれるだろう。指紋がどれほど焼けるかはわからないが、父は悪事を働くような人間ではない。私は安堵した。

あとは、天に任せ、助けが来るまでこのまま眠ればいい。そして、不都合な部分については記憶喪失を装うだけだ。不本意だが、時に、くだらない演技も必要になるのかもしれない――。

正面でゆれる、大きな炎を見ながら、さようなら、と呟いた。

どれほど灯りを眺めていただろう。前の車は完全に火に包まれた。父や母のことを想うと泣きたくなったが、まだ気を緩めるわけにはいかない。私が完全に父として出発するまでは、慎重にやらなくてはならないのだ。

何度となく車内から振り返った。そして、ようやく、遠くに車のライトが見えた。これで、事故を通報してくれるだろう。私は眠るようにして目を閉じ、耳だけをすました。本当なら、芝居などではなく、昏倒していたいくらいだった。

真後ろで車が停まり、ドアの閉められた音が二回。聞こえた声から、若い男女と推測できた。

ありがとう。本当にありがとう。私はゆっくりと目を閉じ、新たな始まりを待った。

「ですから、結構です」

私は、電話の相手に何度も同じことを言った。

「そちらの息子さんに関しては、もちろん怒りはあります。しかし、あなたたちも同じくして大切な人を亡くしたわけです」

気が逸っていた。加害者の家族など、正直どうでも良かったのだ。「お互いが悲しみを背負うことになった。大切なのはこの先のことです。残った者、それぞれの人生です。それを代理の贖罪で費やし続けるなどやめてください。それに、きっと、ことあるごとに私はつらくなるでしょう。あなた方はたった一人のお子さんを亡くされた。私には子がいる。それだけで十分じゃないですか」

これから始まる私の平穏を、やがて偽りとなる神妙さで乱さないでほしい。献花されたあの花は、枯れていたのだ。何度となくそれを繰り返し、いつしか花はなくなった。私はそれを知っている。だがそれを責めるつもりもない。だから、もういいじゃないか。彼等に対して、私は、善人にも、悪人にもなるつもりはないのだ。

「ええ、ですから、そうお願いしているんです。変わり者と思われともかまいません。私には、これからの生活のほうが重要、いえ、大切なのです。この悲しみは背負う。しかし、あなた方にそれを掘り起こされたくはない。もう、二度と電話はしないでください」

そう言って受話器を置いた。

事故のあと、目撃者によって救急車が呼ばれ、私は服まで染まるほどの血を流してはいたが、彼等の助けの声に反応し、車から出て少し歩いた。ある程度自立できると暗に知らせ、身の回りのものをしっかりと確保しておきたかったからだ。死者が三人もいるのだから、私のことよりそちらの確認のほうが重要となるだろうが。

ずいぶんと長いあいだ燃えていた。加害側の運転手が、自身の交

流に関して秘密主義であることと、父の遺体が身元不明として扱われることを願った。もし、なんらかの謎が残ったとしても、向こうと私とに、事故だけの接点しか見出せないだろう警察に、怪しいやつだとして私が詰問されるようなことはないだろう。

私は、わざとらしくうろたえることができず、地面に座り込み、朦朧として茫然自失を装った。それくらいでいるのがちょうど良かったのだ。

それからしばらくして救急車と消防車が到着し、あとから警察も来た。母はバックボードに括り付けられ、救急車で私も病院へ搬送された。

病院に運ばれたあと、治療後に包帯を巻いてもらった。このことで仮面をつけたような安堵を味わう。早いうちに整形手術はしなければならぬだろうと考えていた。怪我は顔以外なく、医者にあれこれ聞かれたが、他に痛い所も無いと言って検査も入院も頑なに拒否した。

診療室を出てすぐ刑事が話しかけて来、事故についてあれこれ聞かれ、順序は忘れたが、その時に他の医師から母の死も告げられた。一瞬だけ驚いて見せた後、慣れた自失を保ち、きつい目で眺める刑事へは逆に質問をいくつもした。混乱していることをアピールしようと必死だったのだ。

時間はずいぶん経っていた。朝の六時頃だったか。息子のこともあって、帰宅させてもらうと、刑事には、事故に関することはあとで頼みますとお願いした。その後には、葬儀や、届けや、加害者の家族や、親族や、仕事……雑多なそれらを考えるだけで気が重かったが、私はとにかく息子である自分に会いたかったのだ。

帰り際、いざ会うに当たって、緊張といくつかの不安が生じていた。五歳ともなれば、親の判別くらい容易につくだろう、ということ、そして、親じゃないとバレた場合にどうするか、そしてなににより、私が自ら事故の報告をしなければならぬということ。

私は考えていた。

当時、よく覚えてはいなかったのだが、起床して両親がいないことに不安を覚えていた私は、朝の訪問者にあれこれ聞かれ、親戚へつないだ気がする。そのあとに、伯母が尋ねて来、事故の報告があったはずだ。確か、入院が長引く、と言ったか。ショックを与えないための配慮だったのだろう。なるほど、そういう気遣いは必要だ。危うく馬鹿正直に報告するところだった。

そうして、自宅へたどり着き、玄関の前に立ったとき、なにか、この先へ進んではいけないような恐怖を覚えた。両親を運命のままに死なせ、父と成り代わった事より、もっともっと大きな扉を開けるような心地。私の歴史が変わる。それは望んだことであり、喜びであるはずだ。しかし、私の過去が消えてしまうような、私自身が消えてしまうかのような、そんな朧な不安が、徐々に淡くなる紺色の空とは裏腹に、重苦しく心を満たしたのだった。

どれほど逡巡していただろう。扉の前で立ち尽くしたまま、覚悟を決められずにいた。しかし、このままここに居続けても何も解決はしない、と私は扉を開け、中へ入った。懐かしい香りがした。

何もかもが古い。居間も台所も、そしてそこにある全ての物が。感慨が私の胸をくすぐる。ここへ帰ってこられただけでも有難かった。泣きたかった。短い期間ではあったが、私はここで暮らし、育ったのだ。私はしばらく浸っていた。なんと呼べばいいのだろう、もう一人の私、息子が、二階から起きてくるまで、思い出とこの世界とを深く味わい、二つを結びたかった。

押入れの白い襖の前に、箱があった。おもちゃの箱。色とりどりのブロックの入った箱。私は叫びたくなった。ブラウン管テレビの上に家族の写真が飾られてあった。笑顔の父、笑顔の母、恥ずかしそうにして母にしがみついている私。叫びたかった。叫びたかった。

私は！

しばらくおいて、とても深く息を吐いた。もうすぐ、息子、そう、

息子が起きる。私のやるべきことは、無事にこの局面を乗り切ることだ。不安など、感じさせはしない。私が安心させてやるのだから、と。

階段を降りてくる音が聞こえた。小さかった私は、目覚まし時計などなくともこれくらいの時間に、自然と目覚めたものだ。

廊下を歩き、すぐそこまで来た。

感情のみで生きるとはこういう事なのだろうか。息子が、何を察知してなのかは分からなかったが、包帯を顔に巻いた私の背中への言葉、

「だれ？」

が幼い感受性の未知の部分の私に、戦慄とともに感じさせた。

私は震えた。どう答えるべきなのかわからなかった。

しかし、ここで正体を明らかにするわけにはいかない。私は成り代わったのだ。息子がなんと言おうと、社会的な地位は得たのだ。だから、ある程度の虚偽を含めゆくりと説明した。事故ではなく、不注意からの怪我ということ、そのせいで私の記憶が少し不正確になっている可能性、それから、現時点での混乱を防ぐために、母はしばらく帰ってこないということ、けれども、多少の不都合はあるかもしれないが、生活での苦労はかけないということなど、じっと目を見て言った。目の前にいる私は小さかった。あどけなく、脆そうだった。これは本当に私なのだろうか、と思うほど実感がなかった。小さな私は何を考えていただろう。当時の私と、そこにいる私。話し終えたあとも、息子は怯えていた。その隠し方も、どうすればいいのかも、彼には分からないのだろう。双眸を小さく震わせ、私をじっと見ていた。正体を教えるべきか、と迷った。しかし、幼いこの子に理解などできるわけではない。そうだ、理解などできるわけがないのだ。

かまわない。今は怯えて警戒されようとも、時間をかけてゆくりと打ち解けてもらえばいい。言葉は悪いが、飼いたての仔犬のようなものだ。直に慣れる。きっと慣れる。そして信頼も生まれるだ

ろう。だから、それまで、家を飛び出さないようにこの子を守るのが、今の私の親としての責任だ。そう思った。

葬儀の類は親戚を頼ったが、事故のショックを装って口数を極端に減らしていたため、疑われるより心配をかけるほどだった。

葬儀にあたって、卑怯にも私は、母の死を伯母の口から息子へ伝えてもらうよう求めた。彼女は了承し、私の目の届かないところで言ってくれたらしかった。けれども、息子は母の死について、どことなく感じ取っていたらしい、と後で知らされた。私に対する不穏と同じように、か……。

それから二週間が経つ。私は嘆息したあと、電話先の加害者の親を退け、受話器を置き、顔から頭まで巻かれてある包帯の具合を手で確認してから息子の方を見た。その子は、とても静かに、無表情のまま、ゆっくりとブロックのおもちゃを積み上げている。息子から私に話しかけてくることはまだ一度もなかった。食事の時には私から積極的に声をかけたりもするが、彼は首を縦か横にふることでのみ返事をした。風呂にしても何にしても、とりあえずは私の世話を受ける。しかしまだ心は開かない。だからといって、私には焦りもなく、時間だけを頼りにしていた。

この包帯を取るときはいつだろう。事故を理由に休んでいる仕事を変え、住む場所を変えれば、知人からの視線から逃れられたという意味では、整形手術は必要ないかもしれない。できればそうしたい。

壁にかけている茶色の時計を見た。昼の一時過ぎ。視線を流すように窓の外へやる。

「散歩に行こうか。ご飯も外で食べよう」

息子は横顔を見せたまま小さく頷いた。

外は良く晴れ、風も穏やかであり寒さを感じさせない。晴朗だ。こういった日は、なるべく息子と外に出るようにしている。手を差し出しても掴んではくれないが、私の横をしっかりとついて歩く。

家から徒歩五分ほどのところに、大きな公園があり、野外スポーツの施設や、整備のされた緑が豊かなこともあってか、平日でも人は多い。顔を包帯でくるんだ男が、小さな子供を連れて歩くのはどうか、と最初は不安になったりもしたが、堂々と、前を向いていれば、風貌を怪しまれはしても、それ以上なにごとにも発展しないもののだと理解した。これが、二〇一〇年の世の中だったら、こうもいかないのかも知れないが。

土だけの花壇に挟まれた、石造りの遊歩道を歩き、見晴らしの良いベンチに腰掛ける。芝生の上で犬を連れている中年の女、紅葉を控えほんのりと赤く染りかけた木々をカメラに収めている老人、私と同じように子を連れている女がいたが、特段、眺め続ける必要を感じさせるものでもなかった。

代わりに私が見ていたのは、瞼の裏だ。降り注ぐ日差しが暖かでもとも気持ちが良い、じっと味わいたかった。光のあるほうを探り、徐に首を上げる。そうすると、遠くにいる太陽が、私の露出している皮膚をゆつくりと撫でてくれているのがわかる。そのような心地がする。私は少し微笑み、息を吐いたあと、同じようにして首をおろし、ポケットから取り出した煙草を口にやった。フィルタも全長も短く、かわいらしさがある。あの時代から持ってきた煙草「ナチュラルアメリカンスピリット」は、この時代では売っていない。

だから、この時代にも、未来にもあるホープという一箱十本入りの煙草を私は選んだ。と言っても、この時代に来るまで一度も吸ったことがなかったので、過去と未来の味の違いは分からないが、私の体にはじゅうぶんに安息を運んでくれた。ゆっくりと味わうと、ほのかに甘い香りがする。

煙が少し、息子の方へと流れた。両親は喫煙者ではなかったから、この子は煙草をあまり知ってはいないだろう。事故のせいで吸うようになったと適当にごまかし、家ではなるべくベランダで吸うようにしているため、今日のような散歩の時にしか目にしない。未来を思うと、この子には吸わせたくなかった。

「悪い。煙たかったな」

息子は、俯いたまま首を横に振った。

立ち上がり、備え付けの灰皿に煙草を潰し、「さあ行こう。なにか食べたいものはあるか？」と聞く。

相変わらず黙ったまま首を振るのみだが、今はまだそれでも良かった。

息子は、食べている時も感情を表さない。だから、表面上ではその食事を喜んでいるのかどうかもわからなかった。しかし、息子は私自身なのだから、年齢で嗜好が変わるとはいえ、そう、好きなものはわかるのだ。今までも意識して店を選んだ。注文したものを、息子は一つとして残さなかった。今日はファミリーレストランへ行こう。単純だが、私はお子様ランチをじゅうぶんに喜んだ。

店内でも会話はない。私は口頭で、息子は指をさしてウェイトレスに食べたいものを告げる。二度目の来店となるが、やはりお子様ランチを注文した。私はというと、不景気が理由の節約をしているうちに、すっかり小食となってしまったので、大層なものはいらない。まあ、いろいろなことが起きて、現状、金銭の心配をする必要もなくなっているのだが。

二つの料理が、同時に運ばれてきた。丸く盛られたチキンライスに、イギリスの小さな国旗が立ち、ワインナーやハンバーグといっ

た、完全に子供が喜びそうなおかずの乗ったプレート、そして私には、完全に息子と同じものが置かれた。お子様ランチだ。大の大人がこんなものを頼むというのは、とても恥ずかしいことだとは思いますが、今日だけだ。今日だけ、この昔の味を思い出したかった。あるものを口に入れた瞬間に、昔のことが鮮烈に脳裏に描かれるということ、私は実際に何度か経験している。だから、ここにも、なにかあるだろうと期待した。何かを得るために口へ運んだ。しかし、このお子様ランチは、ただの安っぽい食事でしかなかった。私は自分自身を内心で嘲笑した。眼前には、変わらず無表情の息子。

「おいしいか？」

思わずそう訊く。

息子は頷いた。

少しの間をおいて、無意識の内に煙草へと伸ばしていた手をはつととめ、私はじっと息子を見守っていた。

この時代には希望がある。今はまだ穏やかで安定した世相を見せているが、あと数年もすれば、あのバブル経済の時代がやってくるのだ。私はそれを利益のために利用するだろうか。自分自身へのその問いかけは、愚問だった。利用する気など毛頭ないが、ほんのちよつとの間違いから求めてしまうようなことになれば、見えない何かに対して、大仰に両手を振り乱し、ほくそ笑み、時には睨みつけ、大声を張り上げることになるだろう。探求者は滑稽に踊り狂う――。私は、質素な暮らしで得た諦念を、ここでひっくり返し、感情の大いなる起伏を喜ぶ気にはならない。息子と共にある、ささやかな幸せで十分だった。

しかし、死んだ父の生活のすべては捨てなければならない。私のことを知る者のいない土地が必要なのだ。だから私は、包帯を取る決意をする前に仕事を辞めることと、新たな街への引越しを決めた。職場への挨拶のため、事故があつてから二度目の電話をかけ、これから向かうことを告げる。慣れないスーツに着替え、いつもより包帯をきつく巻き直し、息子に声をかけた。

「この家は気に入ってるか？」

今までのように、首を振る返事をしない。

「新しい場所へ行こうと思う。ここよりは大きな街だ。いろんな電車が走っているし、たまには飛行機だって飛ぶだろう。引越ししよう。どうだ？ それとも、幼稚園へ戻りたいか？ 引越したら、別の所へ通うことになってしまうが」

私は、当時、子の無かった親戚夫婦との生活、という新しい環境になかなか馴染めなかったから、息子が逡巡しているようなその気持は理解できた。嫌だと言っても行くしかないし、息子もついてくるしかない。大切なのは納得することだった。

「父さんな、今の会社で働けなくなったから、これから挨拶をしに

行くんだ。でも心配はいらない。おまえに苦勞をかけるような真似はしないから。言ってもいまいちわからないかもしれないが、とにかく、新しい場所で、新しい生活を始めるんだ。すべてが新しくなる。新しいものは、好きだろう？」

息子は無反応だった。

「それじゃあ、行ってくるから、しっかりと留守番してるんだぞ」その言葉を拒むように首を振った。

「一緒に行きたいのか？」

どうやらそのようらしい。子育てというものは、色々と厄介なのだろうなと思われた一瞬だった。いや、この場合は自分育て、となるのか？ とくだらない事を考えた。

すると、根幹を掘り起こさせる疑念が強くわいた。意味だ。育てる意味だ。私は自分自身の人生を変えたいと願った。同じ人生を歩ませたくない、代理としてこの子を育てる決意をした。それに意味があるのだろうか。たとえ、もう一人の私だとしても、彼の歩む人生は彼自信のものだ。私には無縁なものである。私はあれほど願ったのに。あのような、両親を犠牲にする真似までしたのに。ここに来て、今更に考えさせられた。いや、これはこれから先、何度となくぶつかる間に違いない。はつきりとさせておくべき事なのだ。人生に、意味は必要なのだろうか。私にはわからない。必要と言う者、不要と言う者、そのどちらも生きている。様々な人生を歩んでいる。それらに価値があるのかもわからない。価値が必要なのかもわからない。私はあの事故でここに来た。彼を育てたいと願った。それが揺れることはあるかもしれない。だからと言ってやめられるか？ 疲れたから、自信がないからもういい、と言えるのか？ 普通なら、責任を感じ、愛情とともに子との関係が続けるだろう。私には責任があるだろうか。この時代の人間ではないのだ。しかしやはり、やめたところで行き場所などない。元の時代へ帰れるとも思えない。責任は関係なかった。そうか、人には、居場所が必要なのだ。ただそこに、他者がいるだけだ。そして、考えてみれば、変わ

ったじゃないか。私は望んだ。人生を変えることを。あのまま生きていてもなにも変わらなかっただろう。しかしここへ来て変わったのだ。面白い――。私は未来の人間としてこの時代に対する冷笑を送ろう。そして我が子には！ 情を以て幸せにすると誓おう。あいつ自信の旅立ちの日まで！

「行こうか。始まりだ。二人の生活の始まりだ！」

私は力強く喜びの眼差しで息子を見た。

無表情ではあるが、息子は珍しく視線をはずさなかった。何かを感じ取ってくれたのかもしれない。

父の会社は電車で一時間ほど行ったところにあった。灰色の朽ちた建物と、大きな倉庫、トラックが数台あり、快活な声や機械音が混じって活気はうかがえる。それなりの物流会社だ。そこで父がどのようなことをしていたのか、私は部署すらも知らない。名刺には柳英雄という名前しかなかった。大した役職ではなかったのだろう。事務所はどこだろうか、とあたりをうかがっていると、「もしかして……柳さん？」と横から声をかけられた。

女だ。若い。なぜ私のことがわかったのだろう（正確には私の父ということだが）。この風貌からではない。事故のことを知っていて、包帯を巻いているから、当てずっぽうかなんとなくか、いや、この子を知っている？

「あの、ええと……事故でその、記憶が曖昧で……すみませんがあなたのことも」

女は特に驚く様子もなく「ああ、そうでしたね」と言った。

どこまで事情を知っているのかはわからないが、いちいちすべてを説明しなくてすむのは楽でいい。とっさの対応をその都度迫られるとぼろが出る可能性もある。

「今日、仕事を辞める挨拶に来たんですよ。でもどこに行けばいいのか覚えていなくて」

「かわいいそうに」

軽々しい口を利く女だと思った。父とどういう関係だったのだろう。もし、清算しておくべき関係の相手なら、厄介とまではいかな
いまでも、いささか面倒ではある。

「辞めるんですね。それは仕方ないのかしら……。奥さん、亡くさ
れたんですね」

こいつ……ふざけるな！ 私は、巻いている包帯の下で怒りを抑
える。視線は逸らしていたが、通常ならねめつけているところだ。

私と息子、二人の単純な船出じゃあないか。挨拶をして去る。そ
れだけじゃあないか。なのに、こいつがじゃまをする。正体も分か
らない女だ。その容姿をまじまじと見ようとすら思わない、とるに
足らない朽ちた路傍の存在なのに！

「妻はね、生きていますよ」

ここでようやく、私は女をじっと見た。

冗談でしょ、と言うような、笑みを含むありきたりな驚きの表情
をしている。

古くさい化粧だ。昭和の古くさい女。顔立ちは整っているので、
この時代では美人のたぐいかもしれないが。ふわふわとしたこの髪
型……なるほど、そうだった。今は昭和なのだ。しかしどうであれ、
この女のせいで、悪意しか生じない。とても腹立たしいのと、関係
が不明瞭であることに對する苛立ちとがある。

「本当かしら。じゃあ、誰のお葬式だったのかしらね」

反応をうかがうために少し試しただけだ。この話を長引かせるつ
もりはなかった。

「冗談です。すみません」

「気になるのね。あたしが誰なのか。安っぽい嘘を言ったりなんか
して」

「いえ、そんな……」

息子が私の脚にしがみついた。

「あの、挨拶に來ただけなので、場所を教えていただけないのなら、
私はこれで」

此処にいるべきではない。

「待って！ あのときの言葉、きちんと守ってくれるって言ったんだから」

……くそ。来た。私はこれを避けたかった。真実がわからない以上、主導権はあちらにある。これがはったりなら、とても強かな女だ。

「すみません。あのときの言葉ってなんでしょう。本当にわからないんです。お気を悪くさせたのなら謝りますので」

「結婚――」

こいつ、子供の前でぬけぬけと。しかし一体、父はなにをやっていたのだ！ このような愛人を作り、偽りの家庭を築いていたのか――。

記憶喪失を利用し続ければ、この女に付け入られるのは必定だった。過去で生きることの手段、作法、そう、その作法をいきなり挫かせるつもりなのだろうか。私は挨拶のために此処へ来たことを後悔し、逃走したい気持ちでいっぱいだった。しかし、それでは解決にはならない。長引かせないように、引きずらないように、今、此処で、この女と決着をつけるべきなのだ。

私は女へ顔を向け、ゆっくりと口を開く。

「私は妻を亡くしました。私も、息子もショックを受けています。そして、これから新しい生活を静かに始めよう、そう二人で決めたところなんです。そこへ、急にあなたが現れた。私は記憶をなくしています。いきなり結婚と言われても、過去になにがあったか覚えておらず、動揺するしかありません。あなたと過去、約束をしていたのなら、とても失礼なことだし、あなたも不服でしょう。だから」

「待って」

と私の言葉を遮った。言わせないつもりらしい。

「待てません。言わせてください」

「だめ！ だめ。そうはいかないわ。だめなのよ」

この女、調子を狂わせる。油断すれば、すぐに相手のペースにな

る。まずい、非常にまずい。

私は焦燥にかられる。いっそ、包帯をはぎとって、あなたの知る相手ではない、別人なのだ、としらしめてやろうか、とすら思った。無論、そんなことをしてしまえば、息子にもさらなるショックを与えるだろうし、騒動が大きくなり、面倒が発展する。できるわけはなかった。

「お願いです。進ませてください。息子と新しい生活を始めると誓ったのです」

「結婚するとも誓ったわ」

「覚えていません。それに、今の私はあなたのことをこれっぽっちも知らないし、過去、仮に愛し合っていたのだとしても、今は惹かれるものも感じないのです。記憶とともに消失してしまった、と考えてもらえませんか？ 今の私たちにとって、あなたは障害となっている」

「だからなに？ それがどうしたの？ 柳さん、事故を都合よく利用してるんじゃない？ あたしには、そう思えてならない。最初から遊びだったのなら、そう言いなさいよ！」

「人目もありますし、息子もおびえてます。どうか落ち着いてください」

「あなたはそうやって記憶喪失の紳士を気取る！ わからない、知らないって言えばいいんだから、冷静でいられるわよね」

父とこの女の関係はもはや本物だったのだろう。なんという父親だ。亡くなったばかりだが、十分な軽侮に値する。あのような死に様を迎えたことは罰だ。そして私は、この危機を乗り越えなければならぬ。旅立ちへの試練ともとれることはできるが、父のせいで降り懸かった災厄なのだから、やはり父を恨む。

とりあえず、言葉だけでこの女を説得できるだろうか。できるとは思えない。女という生き物は、なぜこうも感情で先走るのだろう。こちらの話にはまともに耳を傾けず、勝手な思い込みや、時に過剰な自意識で自己完結させ、真相を知ろうとも、聞こうともせず、仮

に一言だけ許されたとしても、やはり先走らせた感情で相手を否定する。これでは会話が成り立たない。出かかっていた真実は、馬鹿らしきとともに喉から胸の奥へと引っ込んでゆく。いったい、何であれば満足するのか、女が求める、望む真実とは何だ。愛の有無のみが、女にとっての真実なのだろうか。なるほど、そうして父に遊ばれたわけだな。耳元でささやかれた愛が偽りとは見抜けずに、それのみを信じた結果がこの様か。哀れなものだ。

しかし――、面倒だ。この女とは、いま、ここで、すべてを清算しておくべきなのに。私に向けるその否定を、自身の抱く愛へと向けて欲しい。できるなら、感情的になったときに見せるその醜惡な表情での否定を望む。

私は、咳払いを一つして、ゆっくりと煙草に火をつけた。

「わかりました。きっちりとお互い納得できる話をする前に、あなたのことを教えてもらえませんか？　もしかすると思ひ出せるかもしれない」

「芝居臭いけど、まあいいわ。麻由美よ。仕事は事務。ほかに知りたいことは？　なれそめ？」

「はい、息子に影響のない範囲で」
すると、女は淡々と語った。しかし時間はそれほど要さなかった。たんなる、社内恋愛だったからだ。

年齢は二十五、取り立てて若いというわけでもなく、よくわからないが、この時代なら結婚適齢期くらいかもしれない。多少の焦りでもあるのだろうか。

私は簡単に礼を言い、言葉を探した。

「あなたは私との結婚が望みなのですよね。記憶がなくなって、あなたには別人のように思えるとしても」

「ええ。逃げるのは卑怯よ」

「愛がなくても納得できるのですか？」

「忘れたと言うのなら思い出させてみせる、無くしたと言うのなら取り戻させてみせるわ」

なんと迷惑な。

少し考え、とりあえず場所を変えようと提案した。喫茶店かファミリーストランでも近所であればいいのだが。

「そうね、会社の前で立ったままの痴話喧嘩なんて、あなたにとってマイナスですものね」

「私はもう此処を去るのですからどう思われようともかまいませんよ。残るあなたにとっての方がマイナスじゃないですかね」

女は少し黙った。

「いいわ、近くに喫茶店があるから、そこで話をしましょう」

女が後ろを向いた瞬間、とても馬鹿らしい、しかしこれ以上になる方法がひらめいた。いや、天からの指令だ。私がこんな意気地のないことを思いつくはずがないのだから。

私は逃げた。息子を乱暴に抱き、逃げた。走った。とにかく走った。会社への挨拶などもう知らん。手続きも知らん。もらえたはずの金ならなんとでもなる。軽薄な父のおかげで！

振り返らなかった。女は気づいてすぐに、何かをヒステリックに叫んだが、私の耳は受け付けなかった。

しばらく走って息切れの兆候を感じ、ここでようやく振り返る。いない。女はいない。勝った！私は禍根に打ち勝ったのだ。肩を揺らし、馬鹿野郎め、と呟いた。これで二度と会うこともない、と確信する。

息子はこの姿を見てなんと思っただろう。子供ながらに、愚かだと思ったのだろうか。

冷静に考えると、父としては見せるべき姿ではなかった。逃げたところで、女が家の前まで来ていないという保証もないし、引越した後、郵便関係から居場所をたどられる可能性だってある。

私は全く冷静ではなかったようだ。なんと愚かなのだろう。自己嫌悪はあったが、やってしまったものは仕方がない。もしまた顔を合わせることがあるのなら、その時は、あまり気は進まなものの、決着をつけよう、と考えた。私は父を軽蔑できるような人間ではな

いのかもしれない。

しかしそれもこれも、原因は父にあるじゃないか。そうだ。父のせいで私はこんな目に遭っているのだ。

私はあれこれ考えたが、やがて、成り代わるとはこういうことなのだ、と納得することにした。これを受け入れずに、新たな生活は始まらない。降り懸かる難題はゴミを払うように掃除すればよいのだ。

私は、もはや退職の挨拶の責任は放棄することにし、息子に一言、先ほどの行為を謝っておいた。息子は尚も無表情のままだった。

あの日以降、何事もなく数日が過ぎた。逃亡した私を見て、彼女は馬鹿らしくなり、すべてが醒めてしまったのかもしれない。そうなら、それは喜ばしいことだ。

今は新しい住処を探し、息子についてきたがったが、留守番をさせ、私一人で不動産屋を行き来している。包帯を外す開放感を味わえる一時だ。この時代、ネットが普及していないことの不便を感じはするが、これはこれで新鮮でもある。なにをするにしても、外へ出なければならぬ事柄だらけなのだ。

私は、希望を持って社会に出た頃の未熟だった時代を少し、思い出していた。

三流の大学を無難に卒業後、自由を仕事に求めた。やりたいことをやるという自由。何にでも挑戦し、人生経験を積みたいという単純な欲求から、アルバイトで様々な業種を転々とした。飲食業、設計事務所、ボーイズバー、舞台道具係り、ゲームセンター、ホームセンター、八百屋、弁当配送、駐車場スタッフなどだ。そしてそのどれも、喧嘩別れとなった。長くて半年。たったの半年しか続かなかった。責任という言葉を忘れ、あまりに奔放だったのだ。自由をはき違い、方々に迷惑をかけた。それらを反省し、謙虚を心得てようやく得た無難な定職だったのだが、今はこうして過去にいる。未来を感じさせないあの場所より、この方が面白いことになる、とは片隅で思っている。歴史を繰り返して体験するということには、苦味もあるのだろうか。

私を物思いから引き戻すように電話が鳴った。出ると、会社からだ。私はすでに、私の社内での位置というものを理解していたが、こうして連絡がくると何となく腹立たしかった。

私が、会社へ挨拶に行くと言電話して放置し、それから何日経っているか。それだけでも、父の哀れな姿が伝わってくる

る。会社にとって父は、取るに足らない存在だったのだ！ 私の美化された父の像が崩れてゆく。だが、あの親にしてこの子あり。そう考えれば、情けなくも合点はいった。

ならば、なおさらに、この息子に対する接し方を考えなければならぬ。未来を理解した上で育てなければ、過ちは繰り返されるばかりだろう。

電話は、上司らしき人からだった。心配の素振りは見せていたが、もう大丈夫なのか、いつから働けるんだ、と仕事のことを端々ににじませた。

「すみません、先日、退職願いを届けようと思ったのですが、ちょっとトラブルがありまして」

「なに？ 辞めるつもりなのか」と低い声。

「はい。すみません」

「そうか、残念だな」

やはりだ。やはり必要とされていない。父はこの程度だったのだ。ならば、もうどうでもいいだろう。

「退職届けを渡しにいけないので、そちらで処理しておいてもらえませんか？」

「わかった」

……それだけなのか？ その一言だけなのか？

「やってもらえるんですか？」

「ああ、なんとかしよう」

なんだろう、私から希望したことだが、なぜか釈然としない。喉の奥に痰でも詰まっているかのような心地だ。そして、同時に、父の情けなさに腹がたってくる。父への侮辱を、子が知るというのは何ともつらいことじゃあないか。

「退職金はもらえるんでしょうか」

もはや何の気兼ねもない。会社と係争しようとはまでは考えていないが、多少凶々しくなるつもりだった。

「ほしいのか？」

「そんな返答ってありますか？ 会社側として、社会人として」

「君だってよく知ってるだろう、うちの会社のことは」

「すみませんが、頭を打ったせいで記憶が曖昧なんです」

「なんだまったく、面倒な奴だな。つまりだ、見舞金も出なかったことからわかるだろう？ そういうことだよ」

会社のせいなのか、父が孤立していたのか、もはやそこまで追求する気もない。

「なるほど。よくわかりました」

悔しさはある。だが、このすべては父に対する評価、として忘れることにする。

「どうわかったのかね？」

「要求はしませんよ」

「そうか——。奥さんを亡くされたことは……」

「恥知らずな！ 今更そんなことやめてください。なんのつもりですか」

この男は、葬儀の時と同じ言葉をこの場で繰り返そうとした！

「いや、すまない。そうだな。私も色々つらいのだよ」

「管理職だからとでも？」

「そうだ」

私は大きく息を吐いた。そこに、管理職の板挟みじゃなくあんたからの評価だろ、という理解を込めて。

最後に挨拶を交わし、受話器を置く。これで、すべてと決別できただろうか。あの女は……。

過去へおくべき存在を未来へとつなげてはならない。私の描く未来に存在してはならない者が、海にさまよう漂流者のように、見つけた私の元へたどり着くことは、うらぶれた筏いかだを共にすると言うことなのだ！ そんな物に乗るわけにはいかない。私は未来を知る自由な遊泳者だ。ほら、あの先には繁栄が、私の元には宝がある。この子との生活に、あのような我的張った不穏は持ち込めない。

だが、男としてはいずれ、良い女を求めることもあろう。私がそ

れを望むのならば。

三日経った。私は不動産屋の男と物件を下見に来ているところだ。駅前で落ち合ったのだが、改札口を出てすぐの街並みは、小さいながらも、裁縫屋、和菓子屋、玩具屋などの色々な店、そして大きなロータリー、煉瓦の歩道といった具合で整然としていて木々も多く、美しかった。もともとはなにもない山間部だったらしいが、ここ数年、近隣のそこかしこが開発されているらしい。

新しく生まれる街と新しく始まる私たちの生活。部屋はまだ見ていないが、早くもこの街を気に入った。

案内人は、グレーのスーツを着た小太りの男で、挨拶の後、ぺちやくちやとこの街について喋り、少し歩いただけで暑そうにしていた。季節は冬だ。

道中、どこもかしこも開発の様子があり、一足早く完成している住居には住人もいくつかわいるようだった。駅から五分ほど歩いたところで、「見えてきました、あの茶色いアパートがそうです」と言った。

三階建てで、外装は新しい。私の時代と比べると、デザインには少々古くささもあるが、異彩を放つでもなく周りと調和しており、希望した間取りがこのアパートだったのだから、私はここを気に入るだろうと思った。

息を切らしながら、「さ、あがりました。今は二階、三階の四部屋が空いていますよ」と不動産屋の男。

「間取りは多少違いますか？」

「え？ やっぱり違っていらっしゃる方が良かったですか？」

「いや、そういうわけじゃないですが」

「あ、もしかして双子の女の子とかが好きな方？」

最初にこの男の事務所を訪れたときからある程度の疑念があったのが、今、それは確実なものとなった。この男は、間違いなくあほ

であると。

「今、双子って関係ないですよね？」

「私は好きですけどねえ、双子」

私は返事はせず、階段をゆっくりと上がる男の後に続く。

「とりあえず二階から見ましようか。日当たり良好で解放感もありますよ」

鍵をさし、肌色のシンプルなドアを開ける。なんだろう、消毒なのか香り付けなのか塗装なのか、なんとなく心地の良いにおいが、部屋の中から流れた。

「ささ、どうぞ」

促された私は、ざっと辺りを見回しながら、用意されてあるスリッパにはきかえ、「良さそうですね」と挨拶がてらに言った。

「なんせ建ったばかりですからね。建ったばかりというのは、やっぱり良いものですよ。女と一緒に、古いのはだめです」

私はその言葉に返事はせず、部屋を見て回る。事前情報は間取り図と簡単な説明のみだったが、ここで文句はない。和室が二部屋、それと六畳の台所。十分だ。景色も、風呂もトイレも収納も、不満はない。

「ここでもいいです。ここに決めます」

「え？ 早いですね。上や他の物件見た方が良くないですか？ も

っと良いのが見つかって気が変わるかもしれませんよ」

「いえ、結構ですよ。街並みも、ここが気に入ったんです。それに、最初に紹介してくれたということ、ここが私の希望にぴったりだったからでしょう？」

「え！」

——なんだろう、今の返事は。違うのだろうか、きっと最高のものじゃなかったのだろうか。しかし、声に出してするような返事なのだろうか。それとも、私はあのように聞いてはいけなかったのか？ 私が間違っているのか？ 徐々にわいてくるこの憤懣！ しかし、私はここを気に入ったのだ。この男個人に対しての不服はあるが、

部屋にはない。なんとなくの敗北感、それは捨ててここに決める。

「ここでもいいですよ。エレベーターもないのだから、三階を見る必要ありません」

「え？ エレベーターはありますよ。大家さんがどうしてもつけてくれて頼んだようで。普通、三階建てなんかでは付いてないんですけどね。私は痩せないといけないんで、ほら、階段って運動にちょうど良いじゃないですか。ま、二階程度なら大したこともないですがね。ううん、それじゃあ、エレベーター、乗ってみますか？

そんな珍しい乗り物じゃないと思いますが」と笑った。

私が女子高生だったら、ムカツクムカツクムカツク！ と大声でヒステリックに連呼していただろう。

きつと、この男には、私を田舎者だと馬鹿にするというような他意はない。この男こそがエレベーターとの出会いを大いに喜び、感動したのだろう田舎者なのだ。だから、私に対しても同じだと思い、あのような発言をした。そうだと思いたい。そう思うことにする。そう思うべきなのだ。

私は怒りを抑え、「あるんですか、まあ、別にかまいません。二階でいいですよ」と言った。

間取りも同じだというのだから、どうせ大差もないだろう。見た後で、やっぱり三階の方がいいですね、などと言おうものなら、この男はさぞや勝ち誇るのではないだろうか。そのような表情を見せられた後にここの住人となれば、それこそ腹立たしい思い出として、何かある度、このことが頭に浮かんでくるに違いないのだ。

「わかりました。それじゃあとは事務所で契約についてご説明しますので、後日か、よろしければこのあとでも」

「明日、うかがいます。もう少しこの街を回りたいので」

「あ！ 実はですね、柳さん以外にもここの部屋を気に入っているお客様がおりまして……」

この丸い男は思い出したように言ったのだが、古くさい手だし、なにより、私との契約を意志決定してから言うような台詞ではない。

随分と舐められたものじゃないか！

「そうですか。じゃあ、その人にお譲りしましょうか」

「え！ えっと……ですね」

馬鹿丸だした。

「どうしました？」

「いや、あの……、あ、そうだ、その方は他で契約したんでした」

「なるほど。じゃあ、私はここで大丈夫なんですかね？ 明日伺うことに問題はありませんか」

「大丈夫です！ お待ちしております！」

男と別れ、私は嘆息した。どっと疲れが出たが、気を取り直し、マンションの全景を眺める。まだ引っ越しはおろか、契約さえすんでいないからだろう、何の感慨もない。新しい生活の始まりはやはり、荷造りをし、荷物を運び、部屋を簡単に整えてこそ味わうものだ。よし！ というあの感覚、それを思うと、私の期待は高まるばかりだった。

息子と暮らして一ヶ月が経つ。そうして私は、顔の整形など必要ないのでは、と強く思うようになっていた。あの子はついぞ、幼稚園には行きたがらず、話そうともしないが、従順だ。底では信頼があるように感じる。ならば、多少顔が違っていても、いや、そうじゃない、もっといいことを、方法を思いついた。今までずっと、成り代わることは十分に気をとられていた。しかし、顔を父に似せるのではなく、事故で顔が変わったと言ってはどうかだろうか。ずっと包帯をしているのだ。それは息子にとって、随分と痛々しく映ったことだろう。じつくりと説明し、納得させ、覚悟を決めさせてからこの包帯をとれば、ショックはそれほど無いに違いない。それに、私には父の面影もあるはずだ。

——慎重さを、欠いているだろうか。このことが、決定的な何かを引き起こしてしまうだろうか。

生きている限り、誰であろうと、何らかの決断、選択の必要は迫られる。その瞬間のその決定において、人生のすべてが決定づけられ、選択したものが過ちの決断だったとして、人生のすべてを、その過ちによって終結させてしまう者がどれほどいるだろう。果てしの無い絶望を感じ、衝動的に生を閉ざすという行為は、短絡であるばかりでなく、病的で、放縦で、救いような無い愚かしさを感じさせる。いや、いささか極端にはしまった。私においては、息子との生活が終わってしまうのかどうか、ただそのみを考えればいい。私にとって、真の絶望がなんであるかはどうでも良く、過去、過ちを犯したとしても私は生きた。よくよく見回してみれば、光はどこにでも有るものだ。最悪、それが私自身の命だということだとしても！

終わらせない。終わらせるような真似はしない。これから息子に對して行うこの顔の暴露が、私からの一手だ。最善であろうとなかろうと、私はこの一手を選んだのだ。後悔はない。いや、後悔など

しない。

私は、居間で静かにテレビをみている息子に、話しかけた。

「父さんの怪我だがな、もうだいぶと良くなったんだ。包帯も取れる。取ってもいいんだよ。父さんの顔、覚えてるか？ まさか、忘れたとか言わないよな、はは。これから包帯を取ろうと思う。けどな、怪我のせいで顔が少し歪んでしまったんだ。面影は残っているはずだが、別人だと感じてしまうかも知れない。もし、そう感じたとしても、父さんは父さんだ。今まで通り接してくれるか？」

息子はテレビの方を向き、私に横顔を見せたまま、ゆっくりと頷いた。

包帯をほどこしている間も、息子はこちらを見なかった。

「タカシ、こっちを向いてごらん。傷はすっかり良くなった。どうだ？ 面影は残っているか？」

息子は、相も変わらずゆったりとした動作で、無表情のまま私を見た。しっかりと、長い間、私を見続けた。いや、ほんの数秒の出来事が、私にはとてつもなく長く感じられたのかもしれない。

息子は頷かなかった。振り返ったときと同じ速度で反復するかのように、首をテレビへと向けた。

かすかに、息子の口元が緩んだように見えた。目は全く笑っていない。不敵な笑みだ。こんな表情を、たった五歳の子ができるだろうか。いや、できるわけがない。

そして、直後に放った息子の言葉が、私をかつて無いほど慄然とさせた。

「すべて、知っているんだよ」

息子は、そう言うなり、不自然なほどゆっくりと、首をこちらに向け始めた。

頭ではすぐに理解はできなかったが、心は息子を拒絶した。

やめろ、やめてくれ！ こっちを見るな！

視線が合えば、世界が終わってしまうような気がしているのに、

身体は言うことを聞かなかった。

もし、現実によくな事になったならば、私はどうしただろう。過去へきてしまうようなことが起こり得るのなら、私が顔をさらしたとき、息子が静かに微笑んでもおかしくはないではないか。

「すべて、知ってるんだよ」

という不敵な笑み。そんなものが送られる可能性もありえるのでは、と。

だが、そのようにはならず、おぼろに感じていた恐怖は単なる杞憂として消え、息子はテレビへ向き直すことによって自閉の返答をよこした。私は、安堵した。

拒絶されたわけではない。一応は成功したといえる。告白は成功したのだ。あとは慣れるのを待てばいい。今までの生活で、ある程度の信頼はあるのだから、私は待つ。やはり、これこそが最も重要なのだ。そして、新しい環境への適応や、私にはいなかった親友と呼べる友を息子が得たりしてゆけば、この子もきっと変わっていくだろう。

だが、焦慮はある。私は顔をさらした。それに対する反応が、ただの無表情などと、理解はできても心底で納得のできるものではなかった。

「タカシ、何とか言ってくれ。父さんの顔、おかしいか？　かつこわるくなったか？　怖くないか？　なあ、喋りたくないならそれでもいい。いつものように首で返事をしてくれないか？　私はお前の父さんだ。な、そうだよな？」

——息子はテレビから視線を落とし、少しの間ができた。だが、やがて頷いた。息子は頷いてくれた。今まで怖くて聞けなかったことを、感情の高ぶりによって聞くことができた。そして、喜ばしい返答を得た。私は、この子の父として、この子から正式に認められたのだ。

嬉しさはあった。そして、私が単純なら、この一ヶ月を振り返り、ここで息子を抱きしめ、涙を流していたかもしれない。だが、私が今ここにいる理由は、この子に私と同じ道を歩ませない、というそのためののだ。ここが私の居場所なのだ。まだ先は長い。父として、ようやく出発点に立てたというだけだ。そのことを、馬鹿みたいに喜ぶような真似はしない。しかし、これからは父親らしく、少し大胆にもなれるだろう。

私は煙草を吸おうと階段を上がり、ベランダへ出、一本を口に挟んで煙を吐いた。辺りを赤く染める西日がまぶしく、思わず煙草の火を見る。手元にあるのは、灰をまとったとても小さな火だった。空気が冷たいせいで、煙草を吸う以外、ここに居続けようとは思わず、ベランダにおいてある灰皿で火種を潰し、早々に戻る。

さあ、じきに引越した。この街ともおさらばだ。思い出など、切なくなるだけの疎ましいものだが、いざ、このようにして過去へと戻ってきたならば、あらゆるものに感動を覚えられるという事を知った。このような体験ができた私は、ある意味では恵まれているといえるのかもしれない。良き時代だったのだろうこの過去が、今の私にはとても愛おしいのだ！

居間で変わらずテレビを見ている息子に問う。

「晩ご飯は何かいい？ なんでもいいぞ。ステーキがいいか、焼き肉か、ハンバーグかそれとも――」

このようにし、首を振るまでいくつか並べた。

私にとって、今日という日は、非常に喜ばしいものとなった。記念すべき日なのだ。だから、やはり、少しくらい、少しくらいなら、いつもより良いものを食べてもいいじゃないか。少しくらい。

私は冷静でいたかったのだが、内から生じる喜びは、細胞という細胞をふるわせ、考えれば考えるほど、息子と接すれば接するほど、激しく私を高揚させるのだった。犬は嬉しさのあまり、その場で失禁してしまうことがあるらしい。今の私も同じように……、いや、なんでもない。

私が食べ物の名を無意識に列挙し続け、そうして何となく言った、未来のほうが認知度の高いであろう料理「トムヤムクン」という言葉に対して、息子は一瞬、体をびくつかせた。

近場にタイ料理屋などあった記憶もないので連れていけないのだが、また別の料理名をいくつか並べ立てた後、もう一度、確認のため、無責任に「トムヤムクン」を入れると、同じようにして体を硬直させたのだ。

この言葉の響きが、息子になんらかの興味を抱かせているのは間違いないようで、しからば私は、これを好機としてコミュニケーションが取れないものかと思案した。

しかし、実際にやったことはただの悪ふざけだった。

トムヤムとまで言ってそのあとに「さん」をつけたり「ちゃん」をつけたり、トムヤムのあとに間をおいて溜め、「クン」を勢いよく早口で言ってみたり、「クンヤムトム」とでたらめを言ったりもした。機嫌を損ねないよう、お菓子の名前もいくつか混ぜながら。

息子は私の意図を、いや、悪ふざけを楽しんでいるという意地悪な空気を、幼いながらもやがて感じ取ったようで、手に持っていたブロックのおもちゃを二つに割ろうと、唸りながら力んだのだった。しまった、私はいったい何をしているのだ、と焦りながら自省する。楽しい夕食に行こう、と息子の食べたいものの返答を待っているはずだったのに――。いや、かわいかったのだ。この前にいる息子がかわいかった。小さき頃の私ではあるのだが、その思いよりも先に、小さくて、無力で、従順で、でも一向に話そうとはしない、そんなこの子がかわいかったのだ。だから、あの料理の名に見せた少しの硬直を、私の遊びへと変えてしまった。だがもちろん、憎しみなど一つもない。これは愛のある悪戯なのだ。

私は素直に謝った。そして、トムヤムクンがどういうものを説明してやった。とても辛い食べ物だよ、と辛さを強調すると、それを食べたそうな素振りは見せなかったので、私は再度謝ってから、一から料理の名前を言い直した。

しかし結局、息子は首を縦に振ることはなかった。もしかすると、根に持つと言うことを覚えさせてしまったのかもしれない。

ならば、と私は罪滅ぼしに料理を作ることにした。皿洗いという面倒が嫌いな私ではあるが、長い独身生活で、料理の腕はそれなりにできあがっていた。作ることは嫌いではない。どこかへ一緒に出かけて食事を楽しむという行為の方が、今の二人にとって重要だと考えていただけだ。子の無かった親戚の伯父がやってくれたように。「よし。今日は父さんがご飯を作ろう。初めてだな。おいしいものを食べさせてあげるよ。買い物へ行くが、ついてくるか?」

息子は頷いてくれた。まだ、それ以上を望むべきではないのだろうか。

家から歩いて五分の所と、その倍くらいの所にスーパーがあり、息子とコミュニケーションを取るのと、店内が清潔であるというのを理由に、遠くの店を選んだ。

息子に青いジャンパーを着せる。半ズボンを寒いと言うのなら、何か買ってやろうとも思うが、時代に馴染ませたままでいるには、この姿のほうがいいかも知れない、とも考えた。

スーパーまでの道すがら、私と息子を交互に見やりながら近づいてくる、買い物袋を下げた老婦がいた。

その視線は、露骨で、あからさまで、私を嫌悪させた。そして目の前までくると、「こんにちは」と頭を下げたのだ。

私は、しまった、と思った。全く油断していたからだ。近所の目を、好奇と少しの遠慮の混じる、その目を忘れていたのだ。

あるに決まっていた。ずっと包帯をしていたのだから。それを取り払えば、なにが現れるのだろうかというその好奇心が向けられるに違いなかった。

「こんにちは」

私はとにかく平静を努め、挨拶を交わした。

「包帯とれたのねえ。お怪我はもうよろしいの？」

「ええ、お陰様で」

伏し目がちになる。今まで、挨拶くらいは交わしたことのある相手だが、名前は知らない。老婦の顔の中で荒立つ無数の波から、意地の悪さのようなものが見て取れる。小さな体をひょっこり曲げて、嫌らしい笑みを浮かべ、

「雰囲気だけかと思ったら、お顔もなにか印象が変わってしまったのねえ」

思ったことをそのまま、はっきりと言ってくる。しかし、私が未来から来たなど知っているはずもないのだから、怪しい未来人め！

などと思つての発言でないことは理解できた。

「大変な事故でした」

「良いじゃないの。前よりハンサムよ。前はほら、こう、田舎臭いっていうか、でもちよつと老けた気もするわねえ。事故のせいね。奥さんも亡くされて気苦労があるんでしょう？ 困ったことがあつたらあたしに言いなさいよ？ お金以外のことだったならなんでも、なあんでも協力してあげるからね。やだ、なに考えてるの？ あたしはもう年なんだから、そういうのは無理だからね。ほんと、あはは。それにしても、ほんと別人のようねえ。たっちゃんもビックリしたでしょ。ね、たっちゃん。あら、お父さんの後ろなんか隠れちゃつて、どうしたのかしら？ ああ、お母さん亡くされたからね。でも、ずっとそういうわけにもいかないのよ？ いつかは一人で生きて行かなくちゃなくなるの」

「あの……」

意地悪さは顔だけのようだったが、無神経で破廉恥でよく喋る人だ。

「あら、ごめんなさい」

「いえ」

私はこの際、いくつか質問しようと考えた。

「すみません、先ほど、雰囲気とおっしゃいましたが、どの辺りがどう変わっていますか？」

「え？ ううん、そうねえ」

と私をまじまじと見だした。

「元気はなくなつてゐるわねえ。陰を帯びたというか。まあ奥さん亡くされたわけだから、それは当然だわよね。よく見れば、顔にも元気がないわね。悲しそうな感じ。まあ奥さん亡くされてるしねえ。それも仕方ないのかねえ。あとは、そうねえ、まあよくわからないけれども、災難だったから仕方ないじゃない。一夜にしてすべてが変わってしまう人だっているんだから」

「そうですね」

私はとりあえず安堵した。事故を理由に言うのは、ことのほか効果があるらしい。

「それじゃあ、あたし、夕飯の支度あるのでこれで失礼するわね。あなたも元気だしなさいよ？ 一生つらい人生なんて無いんだから。たっちゃんも、近所の友達は親に言われて遠慮してるだけだろうから、一緒に遊んでるうちに元気出てくるから、そんな後ろに隠れてないで、どんどん外に出なさいよ」

この老婦、もしかすると優しい人なのだろうか。私たちを元気づけてくれているじゃないか。顔の皺と表情だけで、嫌な人に違いないと判断してしまった。私は嫌な人間だ。私の方こそ嫌な人間だった。

ところで、老婦は友達と言った。一緒に彼らと遊べ、と。楽しそうに表を駆ける子供たちの声は、毎日のように聞こえているが、私には、拒絶された思い出しかなかった。

ある日、私は母から促され、彼らに「一緒に遊ぼう」と小さな声をかけたことがある。

しかし、なぜか、彼らは私を見ておきながら、無言で拒んだ。大した知恵も発達していない子供同士での話だ。いったいなぜ否定されたのか、私にはわからなかった。近くにいた母がそれを見て、「一緒に遊んであげてね」と優しく言ってくれた。とてもありがたかった。頷く彼らを見て、私は恐る恐る彼らの輪に混ざった。最初は話しかけてきたが、いつしかそれもなくなった。私は地べたに座り、彼らをただ見ていた。

一緒に遊んだのは、その時だけだった。虐めも何もなかった。私の想いは忘れたが、彼らにとって私は、異質だったのだろう。母は何度か同じようにしてくれた。だが、私は動かず、一人を選んだ。だから、老婦の元気付けはありがたかったが、この子が彼らと遊ぶことはないだろう。

そうだ……私は、ずっとこうだったじゃないか。事故や親戚の家へ預けられたせいではなかった。嫌な思い出として忘れようとして

いたのだ。忘れていたのだ。小さな頃から、ずっと一人だった。自身を軽薄な社会性でもって偽る、ということを感じるまでは。

ならば尚更——、私なのだ。私がこの子に、後悔のない道を歩ませてやらねばならない。本当の友を教えてやらねばならない。だが、親友を得なかった自分にできるだろうか。今からでも遅くないのなら、息子のためにも、私は自分を変えてみようと思う。

私の人生においての後悔とは何だろう。孤独でいたことだろうか、理解されなかったことだろうか、歪と言われるその出来上がった心だろうか、それとも、流され、ただ生きてきたことだろうか——。すべてだった。それぞれの比重は不均衡だが、すべてだ。この子に望むものが、全く違う人生である以上、すべてが哀れな悔悟へ結びつくものなのだ。

だが、その後悔は、今を生きる糧、息子育てる糧となった。私にはもはや、後悔はない。この宝が私を変えてくれたのだ。もし、ここへ来たところで、この子と出会っていなければ、私は何を選択しただろう。この時代を一通り見た後、帰ろうとしただろうか——。すべてが希薄だった。希薄だったのだ。希薄な遺失物を拾いに、いったい誰がその場所へ戻るというのだろうか！ ならばこの時代、何を拾えただろうか。胡乱なインチキ予言者が持つあの水晶か。予言はある程度的確ではあるが、馬鹿らしい派手な衣装を着せられ、衆目の前へと引きずり出され、暇つぶしの道具として弄ばれるだろう。

生きられなかったはずだ。私は生きられない。居場所なんて無い。帰れるのかどうかもわからず、不安に押しつぶされ、自暴自棄になり、事故に遭えば！ とくだらない試みすらしただろう。いや、事故で帰れるかもという可能性はゼロではないのだが——。

客のまばらな本屋の前を通り、編み物がガラス越しに飾られてある裁縫屋を通り過ぎて右に曲がると、見えてきた。主婦連の自転車が入口前に雑然と並べられてある。雑然として見えるのは、フロントの部分が右へ向いたり左へ向いたり、一定ではないからだろう。銀や黒の輪郭が無秩序に入り乱れるその光景は、なぜか鈍重で、私の心を圧迫した。

私の中で車輪が回る。くる、くる、と。

私は立ち止まったまま、右手で額を覆い、顔を撫でるようにして腕をおろした。その動作に意味があるとは、誰にも悟られないようにして。

大きく息を吐く。

主婦の一人が、自転車の籠に荷物を入れ、スタンドをコンクリートの地面に激しくこする嫌な音をさせ、サドルにまたがって力強くこいで行った。開いた場所へ自転車が入ってくる。入り口前に、たこ焼き屋があるので息子に言う。

「食べないか？」

私はすこし離れたところにあるベンチで休みたかったのだ。

息子は首を振らなかったが、かまわず六個入りのたこ焼きを一舟、百円で買った。

店主から受け取って息子をベンチへ座らせ、「ほら」と渡す。私も腰を下ろし、煙草に火をつけた。

息子は小さな両手でかかえたまま、ふたも開けず、なかなか食べようとしなない。

口の中を煙でゆっくりと満たし、少しだけ肺に入れて吐く。
「いらないのか？」

首を振らなかった。

「まあ、まだ熱いだろうし、もう少しさましてから食べるといい」
私はまた、同じように吸った。少し離れた入り口では、いろんな人が出入りをしている。主婦ばかりだったが、色とりどりだ。人の集まるここは、色の為す川で、けれども上流も下流もない。だが、川だった。ここだけが、川なのだ。私の中で、再び車輪が回った。
実感だ。私も世界の中で生きているという実感。人が多ければ多いほど、それはありありと心の中を染めてゆく。そして、それと同時に人々の人生を想うことは、私を疲弊させるのみだった。私はなぜ、人が集まる場所へ来るたび、一つ一つに意識を投げかけてしまうのだろう。接点がないのなら、あの人も、私も、顆粒の景色ではないか。

とてもくだらないことだ、と自嘲する。

たとえば、あのたこ焼き屋の鉄の箱の中で、年がら年中、鉄板の上にある物を転がしているだろう中年の女が、回転の中になんらかの真理を見いだしたところで、私に何の関係があるう。私にとっては、ある程度おいしく、そしてスムーズに買えばそれでよい話であり、その真理が、店主に対し、私は地球も転がせる、などと無茶な発言で世間を騒がせるようなものでないのならば、全く問題は無いのだ。

私は小さな世界で生きてゆく。しかし、あいかわらずこの嫌な癖は抜けそうにない。体質だろう。だから、煙草を吸う。ゆらぐ煙を見る。薄らいで消える紫煙のほうが、よほど儂く、美しいものであるから。

息子が一口ほおばった。やや熱そうにしているが、私は嬉しくてつい微笑んだ。

「おいしいか？」

ゆっくりと頷く。

「父さんにも一口食べさせてくれ」

と言うと、一瞬動きを止めた後、舟を渡してきた。煙草を灰皿へ

落とし、受け取る。

口へ運んで飲み込むと、ちょうどよい温かさが、体の内に広がった。

「おいしいな。全部もらって良いか」

と意地悪を試みると、首を横に振る。

「火傷するなよ」

舟をわたし、煙草を取り出して火をつけた。口から出る煙を弄び、瞬間瞬間の無意識を楽しむ。

残り一個になったとき、息子はそれを私へ示した。あげる、と言っているのだと思う。私は煙草を捨てて素直に受け取り、頬張った。

「行こうか」

立ち上がり、息子を見る。

店内に入ると、しばらくは八百屋や魚屋といった専門店が左右に広がり、その奥が、いわゆる通常のスーパーマーケットのつくりとなっていた。

「お菓子のコーナー、見るの好きだろ」

と言って、好きにしてもいいと促したが、息子はついてくるつもりらしい。

それはそうと、私は何の食事を作ろうか全く考えていなかった。適当にかごに放り込んだ食材から、有り合わせで作ることも可能だが、それはあくまで自分用の食事の時だ。今夜はいつもと違い、息子を喜ばせるという目的がある。

しばらく考えた後に、いくら年をとっても、変わらない好物の一つであるハンバーグにする事に決めた。

「ハンバーグでいいか？」

と息子の横顔に問う。

軽く頷いたので、

「ようし、最高にうまいやつを作ってやろう」

と期待を煽った。

さて、どれが一番、あの口に合うか。和風おろしやチーズ、トマトソース系やデミグラスソース、それ以外にもなんだってできる。しばらく考えた末、一番子供受けしそうな、つまり、オーソドックスな物にすることに決めた。甘くて濃厚なソース。それがあれば良い。

肉類のコーナーへ行き、ミンチのパックを数点かごへ入れていく。商品を目で吟味しながらそのまま横へずれていくと、陳列されている物の色合いが変わり、私の目に、出来合いのハンバーグが数種類

飛び込んできた。そういえばそうだ。今も昔もこういうハンバーグはあった。安っぽいものだが、味は悪くない。

私は息子の視線をどこか遠くへ誘導できないかと考えた。もしも
の時のために、これらのハンバーグを手に入れておきたかったのだ。
「あそこにいるのは、ゴン太くんじゃないか？ ほら、見てごらん」
と、この時代に人気のあったキャラクターの名を告げ、振り返ら
せた。

当然、そんなキャラクターはいない。視線の先にあったのは、茶
色いコートを着た、丸っこいおばさんだった。あまりにも急に思い
ついて実行したため、何の確認もしていなかった。私は少し、その
光景に呆然となりかけたが、隙をうかがって肉のパックの間にハン
バーグを二つ隠すことに成功した。

いったい、私は何をしているのだろう。安堵とともに、嫌悪が生
じた。息子を喜ばせることが目的ではあるが、こんな情けのない真
似で保険などと……。

息子を見ると、キャラクターなんていないじゃないか、という不
満そうな表情をしていた。

浅はかすぎる。とっさのこととなると本当に浅薄でどうしようも
ない選択ばかりしてしまう。そしてその選択は大抵間違っている。

息子にとって、私の放った嘘は、ことのほか大きく不信を残すに
違いないのだ。

ここで嘘を上塗りしてはいけない。冷静さだ。冷静に、最も適切
な答えを考えなければ。だが、このハンバーグのことを知られるわ
けにはいけない。それは決定的な破滅を生むだろう。

「ほら、お菓子のコーナーだよ。子供たちの声が聞こえるだろう？
楽しそうじゃないか。いるんだよきつと。お菓子のおまけかもしれ
ないけれどね。見てきてごらん。父さんはこのあたりにいるから」
まさに子供だましだが、これで良いはずだ。間違いではないはず
だ。

息子は離れなかったが、変わりなく、それから私の後について

きた。その表情はいつも通りだ。助かった、と考えて良いのだと思う。

その後、しばらく店内を回り、食材以外にも日用品をいくつかかごに入れた。最後に、息子のためにお菓子の陳列コーナーへ行き、好きな物をかごに入れさせた。キャメル、ビスケット、マシマロ――。それらは、今の私の好物ではなかった。

会計をすませ、袋に詰める。この時も当然、出来合いのハンバーグのことはバレ無いようにした。

出ると、外は紺色に染まり始め、車道を走る車のライトが、通り過ぎる度に土の壁や電柱や看板を照らした。

息子にはやや前を歩かせた。この暗がりでは、安全のため、常に視界にとどめておきたかったからだ。

時おり響くのは、車のタイヤがアスファルトを撫でていく音。閑静な住宅街ではあったが、この道においては、交通量は多かった。

ポケットに手を入れられないせいで、手がかじかむ。冷たい風は私に厳しかったが、目の前を歩く息子の存在が、それを和らげてくれているような気がした。

帰宅してからは、すぐに料理の準備へと取りかかった。息子は居間でテレビを見ているようだ。この時間帯なら質のいい子供番組も多い。テレビから楽しげな声が届いているが、息子は笑っているのだろうか。

料理の途中、不意に鼻歌を奏でそうになり、はっとした。私は今を、この瞬間瞬間を楽しんでいたのだ。哀れだろうか。いや、誰に笑われることもない、不信がられることもない。小さな世界のここで、私は思う存分、自分自身を愛し、喜びを教え、与えてやればいいのだ。

皿への盛りつけをすべて終えてから、キッチンのテーブルへと呼んだ。花柄のテーブルクロスの上の皿には、きちんと焼いたハンバーグ、ポタージュスープ、平たく盛ったご飯、付け合わせのブロッ

コリー、ニンジン、ポテトのサラダ。色彩は鮮やかで、我ながらとてもうまそうだと感心した。

息子は静かに席に着いた。居間からはテレビの音が聞こえている。しかし、私は消しなさいと言ったことはなかった。二人だけの世界は、あまりにも静かすぎるのだ。

「さあ、食べなさい」

いただきますと言わず、手を合わせることもせず、息子はゆっくりとフォークを握り、ナイフでハンバーグを切った。

手料理なら言ってくれるかも知れない、という仄かな期待はあったが、焦らず待とう。

「どうだ？　おいしいか？」

機械的な動きで口に運び続ける息子に聞く。

頷く息子に、私は安堵した。そうしてようやく、私も一口目を運ぶことのできたのだった。

おいしかった。なぜ今、二人でこのことを喜べないのだろうか、と噛みしめるほどに涙が出そうになった。

いや、私は自分を笑おうと思う。我が子のような存在を得るだけで、こうも変われるものなのか、と。

息子は一つ残さず皿をきれいにあげた。空っぽになった皿に、ソースが子供の絵のように広がっている。ちゃんと食べてくれた。それだけでありがたかった。

感想を求めることはやめ、皿を流しに重ね、私は煙草をくわえてベランダへ出た。

外気との温度差にいつも通り身が縮こまる。今日という日を、じっくりと噛みしめたかったが、自然がそれをさせなかった。夜の闇や、風の冷たさや、耳かきみたいな街灯、変わりゆく黒雲の形が、私の感動を奪ってゆく。これらが、我が身に対し、代わって何を与えようというのだろうか。望む息子の微笑みより、大きなものは今の私にあるはずもないのに。

私はじっと目を閉じ、静かに煙草を吸い続けた。

引越しまで一週間と迫り、荷造りや掃除、役所での手続き等、忙しくなる。それだけでなく、今月はクリスマスだ。息子に何かしてやらなければならぬ。

両親に関するものはなるべく破棄し、息子にとって不要で私に思いつくのを想起させるものも、ゴミとして捨てることにした。

息子は、部屋の隅で、家族写真のアルバムを眺めていた。私はそれを止められず、黙々と作業をする。

そのアルバムは、すでに私が見ていたものだから、どのような写真がおさめられているかは知っていた。

両親が旅行の度に撮っていた風景写真が主だ。私たち二人に、なんらかの感慨を呼び起こすほどのものではない。

一冊のノートを見つけた。この優しい字は、母のものだ。なんとなしに目を通す。

それは、読んだ小説を分析するかのように日記に付けたものだった。海外文学が好みだったらしい。聞いたことの有る名前がいくつか記されてあった。父は愚かだったが、母は多少、違ったようだ。

母の知らない一面を見た。遺品の整理時ではなく、今この時に見つけ、わざわざ手にとって読んだのは、長く続く作業に飽いたからかも知れない。目を通したところで大きな感動はなかったが、母はこの話題を家族と共にできなかったのだろうか、と思った。いや、話はしていたかも知れない。女に惚けていた父にはどうせ上の空だったろうし、幼い私には理解ができなかったということだろう。

あの、最後のドライブは、もしかすると外で離婚の話をしていたのかも知れないな、と考えてしまうほど、父への疑念と軽蔑を増していた。

書架にある本は持っていこう。数百冊ほどあるのだろうか。私はこれらを読む気はないが、息子は、いつか自然と手に取ることがあ

るかも知れない。

上段の書籍から段ボールへ入れるため、嘆息を一つしたあと、本を取ろうと一気に立ち上がったところ、まるで頭に白のペンキがかけられ、視界を覆っていくかのような心地になった。立ちくらみだった。危険を感じるも、私はバランスを崩し、書架に体をぶつけて膝を突く。なんとか、意識を失うのは避けられそうだ、と思ったそのとき、「あぶない！」と声がした。

刹那、上から本がいくつも降り、私を襲ったのだ――。

幸いにして、肩や身体にぶつかるのみで、大事には至らなかった。上段には軽めの本ばかりだったのもよかったのだろう。

畳の上に散らばる本を見て、ふ、と気づいた。

私は息子を見る。息子もじっと私を見ていた。そうか、喋ったのか。慌てたんだな。心配してくれたんだな。膝を一度引きずって寄り、私は息子を覆うように抱きしめた。きつく、きつく、抱きしめた。そして、「ありがとう。大丈夫だよ」と言った。

これが私の必殺技「ありがとうベアハッグ」である。この技は、感謝すると見せかけて締め付けるといふ、相手の隙をつく非常に凶悪な技だ。技をかけられた相手は、「感謝されているのだから」という遠慮から、反撃できずに気絶する。

――いや、私はなにを解説しているのだろう。息子が喋ったのだ。私に向けて「あぶない」という言葉を放ったのだ。

「父さんと言ってくれ。一度でいい、言ってくれないか、父さんと」
息子を強く抱きながら願った。

「……お父さん」

私は不意に涙を流しそうになった。

息子の両肩に手を置いたまま少し離して目を見つめる。言葉がもう、出てこなかった。ありがとうすら言えなかった。

息子は、よくわからない、というような表情で私を見ていた。
小さな体を、もう一度抱きしめた。

あれ以来、息子はあるていど話すようになっていた。饒舌と言うほどではないが、天気の話や、テレビの話や、食べ物、とくに好きなお菓子のことを朴訥ながら、話した。日常に、いくつかの微笑みが混ざるようになったのだ。

「引越したら、仕事を探さなくちゃならない。幼稚園、また行きたいか？」

昼下がり、外は十分すぎるほどに冷えているが、井戸端会議をしているらしい主婦連の、ときおり大きくなる笑い声に、子供たちの甲高い叫びが、たびたび被さっている。

息子にも、早くあのように遊べる環境を、多くの交流の機会を与えてやりたかった。

当時の私は、預けられたことに対する遠慮が子供ながらにあったのか、従順で素直だった。孤独だったが幼稚園へも行ったし、大抵の事は受け入れた。何年間も、真面目な振る舞いで自分を偽ったのは、やはり、遠慮からだ。

「家がいい」

「どうして。父さんはいなくなるんだぞ？ 帰ってくるのは夜か夕方だ。一人だと寂しいだろう。泥棒がきたり、幽霊がでるかも知れないぞ。食べられちゃうかも知れないんだぞ？」

それを聞くと、息子は口を閉じたまま横に伸ばし、目を大きく見開いて私を見た。どういう心境なのか、まったくわからない。怖がっているのだろうか。

「幼稚園行く」

「おお、そうか、それがいい。幼稚園だと友達もできるし、おもちゃもいっぱいあるし、みんなでお歌もうたうんだ。必要なら、父さんがお弁当も作ってあげるよ。ほら、幼稚園と遊園地、音だって何となく似てるだろ？ 似たような場所なのさ。行ったことあったか？ どちらにせよ、きっと楽しい」

「うん！」

とても元気な返事だった。まるで別人のようにさえ思える。もは

や私とは別の道だ。私は確信した。人生が確実に分岐しているのだ。
あとは、この邪気のない元気な態度が、他の人たちにも向けられ、
やがては温かな人々に囲まれることを望む。

午前中から始まった引越作業は、荷物が少な目だったからか、移動を含めて午後の二時半には終了した。新しい部屋には、段ボールが数個積まれている。未来を感じさせる物、例えば携帯電話、本当の身分証明書や紙幣の入った財布などは、息子に分からないように隠す。残りの物を一気に整理するのはやめ、しばらくはゆっくりしようと思った。

窓を開けて、作業で温まっていた体を冷たい風にさらす。身を引き締めるように心地がよい。

所々薄茶色くハゲている開発途中の街を眺めながら、煙草を一本吸う。

こうやって落ち着いてみてわかったが、近くの四方を背の高い建物に囲まれていないと言うのは、なかなかの良いものだった。あとどれくらいでこの街の開発が終わるのかは知らないが、私はこの、二階からの眺望を、大切にしたいと思った。

「おもちゃ、どこ」

息子が声をかけてきた。ずっと退屈そうだったが、引越しが終わったことで、自分の持ち物を気にしだしたのだろう。

ストーブをつけたあと、私は段ボールを探り、マジックで書かれてある文字を読む。

「あつたよ。これだ」

ガムテープを破り、「遊んだら、しばらくはここにしまおうんだぞ」と伝えた。

がちやがちやと音をさせ、嬉しそうに中を探っている。

私は、これからやる手続きや作業を、紙に書いてまとめることにし、小さな丸テーブルの前にあぐらをかいだ。

どれくらいぶりだろう。新しい畳の上にこうやって座ったのは。私は少し、畳をなで、それから寝転がり、畳に顔を近づけた。

蘭草の柔らかい香りが鼻腔をくすぐる。なぜか、とても安心できた。

いつの間にか、閉め切っている窓の一つから、傾いた陽光が突き抜け、差し込んでいた。身体を包む、暖かな光だ。

私は、目を閉じ、「いいな、昼は」と言った。

さらさらで、ざらざらで、まるでひとつの体に二人の女性がいるかのようなだ。そのどちらも、とても優しい。

私は何度か、指を滑らせるようにして撫で、肌のような感触を楽しんだ。

息子を見ると、遊びに疲れたのか、畳の上で眠っていた。静かで、落ち着いた、十分な安心を滲ませている、優しい寝顔だ。小さな、幸福の子だ。

寝室にある小さな布団をカバーから出し、息子を抱いてそこへ寝かせた。手伝いと言うほどのことはしていないが、色々と動いて疲れたのだろう。

ストーブを消し、紺色の薄汚れた外套を羽織り、眠っている息子を起こさないよう外出の準備をすませた。

アパートの階段を下りるときに、派手な若い女とすれ違った。この時代の女はどんな化粧をしようとすべてイモくさく見える。テレビにでているアイドルもだ。見る度に思うが、髪型と化粧がいけない。しかし、男もイモくさい。もしかすると、私なんて、それほど服装に気を使っているわけではないが、流行り廃りを知っている分、先端を取り入れればそれなりに女にモテるかも知れないな、と馬鹿なことを考えた。

私は会釈する程度で、その女に引越しの挨拶まではしなかった。

「えっと、あなた、新人さん？」

後ろで声がした。振り返ると、やはり私に言っているらしい。

「新人？ なんの」

その女は、二十代前半に見えた。軽いノリを好みそうだが、同時に怜悯なものも感じた。ゆるんだ口と鋭い目がその差を生み出して

いるようでもある。

「このアパートの」

「新人なんて呼び方しないだろう」

「なんだっていいじゃない。新しいことには変わりないんだから」

「何か用か？」

「新人はもう少し謙虚に振る舞うものよ」

「用がないなら行くぞ」

「あたしの部屋に来ない？」

「頭がイカレてるのか？」

これは関わらない方がいい。病気だ。きっと、コートに隠れた手首にはいくつも傷がある。そこになれば首か。首……。昔、自分の首を紐で絞める女と出会ったことがある。それと同じだ。痩せていて綺麗だったあの女は、男に依存し、殴られ、殴られ、殴られ、それでも男に依存して、顔に赤や紫色をした淫靡な痣を作って会社に行っていた。淫靡だが、不幸の焼き印だ。他からは相手にされなくなる。哀れな女だった。この女も似たようなものだろう。絶対に関わってはいけない。しかも、初対面の男にいきなり話しかけてくるような女には。

「失礼ね。イカレてなんていないわよ」

「じゃあなぜ、よく知らない男を部屋に呼ぶ」

「気に入ったから」

「独身に見えるか？」

「微妙なところね。いるの？」

「いや、息子と二人で暮らしてる」

「じゃあいいじゃない、部屋に来ても」

「お呼びじゃないんだよ、おかしな女だな。いや……ところで君は、自分で自分の首を絞めたことはあるか？」

「ないわよ。なに？　　ははあん、あんたもしかして、そっちの趣味があるの？　　だったらいいわよ、付き合っただけでも」

「聞いてみただけだ。とにかく、君みたいなのは病院へ行った方が

いい。医者の方が知的で金も持ってるぞ。もちろん病気だって治してくれるだろう」

「何なのよ！」

女はいきなり怒鳴った。三階建てのアパートの部屋すべてに響きそうな声だ。私は多少、驚きでのけぞったが、こりごりだ。こういう女はこりごりなんだ。

「やめてくれ。私のどこを気に入ったかは知らないが、君の思うほどの男じゃない。私の世界はひたすらに静かなんだよ」

「何よそれ」

「わかったら？ お互いどこがおかしいのさ。でも、私は君のような人は苦手だし、魅力を感じない。だからもう一度言う。頭と心の病気なんだから、病院へ行ったほうがいい」

言い過ぎたか、と思った瞬間、近づいてきた女から平手が放たれた。しかし、それはなぜか、頬の直前で止まり、私にかすかな風を与えるのみだった。

「最低」

「聞きなれた言葉だ」

私がなぜそんな事を言ったのかはわからない。私は踵を返し、階段を下りた。後ろで捨て台詞のようなものがいくつも吐かれたが、それもすべて聞きなれたものなのかもしれない。

外は、斜陽が眩しかった。道のすべてを銀で重く打ちおろし、鮮やかな朱に染めて、世界に対する直視を阻む。手をかざして日除けにし、辺りを見回したあと、太陽が背になる道を歩いた。

目的はなかったが、しばらくも行かないうちに、ぐうと腹が減った事に気づいたので、どこかで食事をとることにした。そのあと、息子においしい土産でも買ってやろう。

商店街と言うほどの規模ではなかったが、飲食店が並ぶ一角を見つけた。中華料理屋、喫茶店、和食の店、閉まっていたが和菓子屋もある。

中学生くらいの頃だったろうか、私は相変わらず親戚に対して遠

慮がちだったが、それでも外食にはよく連れられた。特に、うどん屋ができて以降は、伯父の好物だったのだろう、その店が多かった。今ならそれぞれの店主の、味に対する信念はある程度理解できるが、当時は、ただ食べていただけだ。

私は、私自身の人生だけでなく、親戚家族の人生まで変えてしまったのだな、と感謝と少しの申し訳ない感情が生まれた。子のない彼らが、実は私を荷物扱いしていたのなら、逆に感謝してもらいたいところではあるが。しかし、もう二度と会うこともないだろうから、真のところはわからない。

ふ、と私のやっていることは、伯父と何ら変わらないのではないのか、という気になったが、変わらなくて当然だった。それぞれの家族の行いに、いったいどれほどの差があるというのだろう。朝に起き、食事をし、仕事、学校へ行き、夕方、夜に帰宅し、食事をして寝る。その繰り返しなのだから。大切なのは日々にあふれる愛情と、過去と明日を結ぶ家族の絆だ。

私は、一人で食事をとるのはやめ、唐揚げ弁当とチキン南蛮弁当を持ち帰ることにした。

冬の夜はあつと言う間に降りてくる。さっきまで街をあれほど紅く焼いていた太陽は姿を潜め、他の場所へと浮気する。変わって遠くの星々が、力を合わせて空を輝かせるのだった。

帰ると、息子はまだ寝ているらしかった。上着を脱ぎ、弁当を丸テーブルの上へ置く。

襖をそつとあけ、「ご飯だよ」、と声をかけた。気持ちよさそうな表情は変わらなかった。

息子を隣に置いて一人で食べる食事は侘びしかった。ずっと、数年間もこうして一人で生きてきたのに、ほんの少しのことで、感情はこうも揺さぶられてしまうのかと気づき、不思議な気持ちになる。せめてこの空間を音で満たそうとテレビを配置し、電源を入れた。番組の内容はどうでもよかった。ただ、ときおり入る笑い声には苛立ちを覚えた。

食べ終えて容器をゴミ箱へ放り投げてしばらくすると、この時代へ来てから好んで見ていた番組が始まった。簡素なセットのクイズ番組だが、真剣なのか、ほとんどの回答者が終始無表情で緩慢なのがおもしろかった。

しばらく眺めていたが、外がなにやら騒がしくなってきた、そちらのほうに気になりだしてきたものだから、ドアののぞき穴を確認しに行く。グレーの壁が見えるだけで、騒音の元は玄関前にはないようだ。

ドアをそつと開けて確認してみると、階下が騒がしい。女がきやあきやあ喚く中に、ときおり老人らしき男の声が混じった。女は、夕方のあいっだだろう。男はこのこの住人かもしれないし、女の保護者かもしれないし、それ以外かもしれない。

一向に女のヒステリックな叫びはやまず、他の誰かが仲裁してくれる気配もなかったので、私は嫌々ながらも注意をしに行くことにした。

降りると、一階入り口入ってすぐのところまで女がこちらに背を向けて、老人の手を握っている。

私に気づいた老人が、口のまわりに蓄えてあるもじやもじやした銀の髭を食べんとするかのよう大きく口を開き、

「あ、あ、あ……」

と弱々しく呻いた。どちらも同じだけの光を失ったようなその双眸は、私に何かを哀願しているようだった。

「あんた、もしかしてこのマンションのトラブルメーカーってやつか？」

女は振り返る。夜用なのだろうか、化粧がさっき見たときと比べて、一段と濃くなっているような気がした。まるで品のないできそこないの絵画を見ているような気分だ。

「あら、こんばんは新人さん」

「その人、いやがってるじゃないか。何してるんだ」

「関係ないでしょ」

「さつきから声がやかましいんだよ。迷惑だ。ここの住人として十分関係あるだろ」

「階段がしんどいだろうから、手伝ってあげようとしてるのよ」

「エレベーターがあるだろ。いやがってる。放してやれよ」

「いつもいやがってるわ。エレベーターに乗るって言って。でも、最後にはあたしを頼るの。おぶってお爺ちゃんの部屋まであげてやってるのよ」

「毎回毎回こんなに騒がしくしてるのか？」

「二人の遊びなの。その証拠に、この人何も言わないでしょ？ 天の邪鬼な恥ずかしがり屋を演じているのよ」

私は手を握られている老人を見る。

「本当ですか？」

首を弱々しく横に振った。

「違うって言うてるぞ。この人、喋れないんじゃないのか？ まさか、その人が大家さんか？」

「うるさいわね！　じゃああんたが代わりにあたしの相手をしなさいよ！」

突然、女は怒鳴った。しかし、私は驚くことなく平静でいられた。それは、この女に癖らしきものを見つけたからだ。怒鳴る前の小さな動きを。

右手の中指の第二関節を、人差し指の下をくぐらせた親指で押し、骨を鳴らす。まるで癩癩のスイッチかのようにして。次に怒鳴るときに、またこの仕草をしたのなら、なんらかの覚悟を決めて怒鳴っているという確実なサインということだし、私はさらに冷静になってこの女を分析するだろう。この怒りが感情的なものではなく、意図的なパフォーマンスだとしたら、それは私の興味をひくものだからだ。

そしてすでに、私は好奇心をくすぐられていたらしかった。

「私が行けばいいのか？」

「あら、優しい人なのね。それでもいいわ」

「じゃあその人を離してやれ」

女は言われたとおりにし、「バイバイ、ダーリン」と臆面もなく言った。

女は老人をおいてさっさと上がり、私もそれに続く。振り返ると、老人は睨むように私を見ていた。

女は三階に住んでいた。ドアを開けるなり、尻を叩くようにして急かす。

玄関には棚のようなものがなく、パンプスやハイヒール、ブーツといった、女物の靴が脱ぎ散らかしたようにある。

「踏んじゃだめよ」

数足を整頓して十分なスペースを作り、スリッパにはきかえた。準備されていたのは、男を頻繁に引き入れるからだろう。

通された部屋は、畳の上にピンクのマットを敷いて、むりやり洋風調にしているもので、壁に張ってあるポスターの中の、硬派そうなミュージシャンが、この部屋は息苦しいとでも訴えているかのようだった。

女はコートを脱いで華奢な身体を見せつけ「好きに座って。音楽、

かけるね」と言った。傷のたぐいは見えなかった。

「音楽は、できればやめて欲しい」

よく知らない女に、空間を演出されると思うだけで寒気がした。奏でられる音で、相手のペースにも乗せられなくなかった。

「変な人ね」

「変じゃない。いや、お互い様だったな」

「変な人」

「話がしたいんだろ？ 音楽と一緒に楽しみたかったのか？」

「別に話がしたいわけじゃないの。誰かそばにいて欲しいだけ」

「寂しいのか？」

「言いたくない」

「言わなくたって態度や行動にでてる。分かりやすすぎるほど」

「それが勘違いだとしたら？」

「ああ、思い出した。君はさっき怒鳴る前に、一度覚悟を決めたよな。感情的に突っ走った訳じゃなくて、よし怒鳴ってやるというふう」

「……ウイスキーでいい？」

「答えろよ」

「知らない。感情的よ。腹が立ったから。ウイスキー持ってくるね」
女は立ち上がると、部屋を出た。

触れられたくないことのようにだ。相手が友人なら遠慮もするが、私は、理由を知りにここへきただけなのだから、好きなだけ質問してやろうと思った。もちろん、追い出されない程度に。

キッチンの方から、グラスを集める音や、冷蔵庫を開けたり閉めたりするような音、氷を砕くような音が聞こえる。

部屋の片隅にある台に、いくつもの香水の瓶を見つけた。中の液体はどれも薄く透き通っていて、綺麗だった。だが、あの女はこれらの香水をつけていない。中身はまったく減っていないようだし、彼女に近づいても、ほのかな香りを感じることがなかったからだ。

女がトレーにウイスキーの一式を乗せて持ってきた。

「なあ、香水が好きなのか？」

「気になる？」

「だから聞いてるんだ」

「好きよ。でも、香りはいらぬ。小物として好きなだけ。きらき
らして綺麗だから。あたしもあんな風になりたいの」

「意味が分からないな」

「みんなそう言うわ。だからっていちいち説明もしないけど」

「君の方が変なやつだ」

「お互い様でいいじゃない」

私は肩をすくめるよう吐息した。私もきつと、どこかおかしい。
そのことを深く考えたくはなかった。しかし、私とこの女だけじゃ
ない。どいつもこいつも、世界は変なやつばかりだ。

女がウイスキーのロックを作って私の前に出した。下戸だが、飲
んだ。熱いものが喉を焼き、食道を焼いていく感覚がして不快にな
る。

「そういえば、なあ、君はなんていう名前なんだ？ 聞いてなかつ
たよな」

「なんて呼びたい？」

「そういうの、やめろよ」

女はいかにも、詰まらない、という表情を浮かべた。

「マイコよ。あなたの名前は？」

「柳だ」

「苗字じゃなくて名前」

「ヒデオだが、下の名前でなれなく呼ぶなよ？ いいな」

「ヒデちゃん」

そう言って、目の前にいるマイコと名乗る女が、きゃははと笑っ
た。父を侮辱された気になった。

私はウイスキーを飲んだ。内にわいたムカつきを、きついアルコ
ールで誤魔化する。

この女の年はおそらく二十三四といったところだろう。だが、あ

えて聞かなかった。いくつに見える？　と鬱陶しい反応があるに決まっているからだ。

「ねえ、さっき、指を鳴らしたこと聞いたじゃない？　知りたい？」
女は二杯目を作りながら言った。

「言う気になったのか？」

「そういう言い方されると、言いたくなくなる」

「悪かったよ。教えて欲しい」

「あのね？」

私を見つめ、ずいぶんなれなれしく、甘えたような口調になっている。

「……やっぱり、言えない」

女の顔が徐々に俯いてゆく。

私は嘆息して目頭を少し押さえた。

「言わないならそれでもかまわないが、好き勝手に想像することになるぞ？　たとえば、君は実はとても臆病で、覚悟を決めるためにああやってスイッチを入れているとか、怒鳴っても嫌われませんように、というおまじないのつもりとか、他には——」

「そのとおりよ。すごいね。簡単に見破られちゃった」

「どっちだ？」

「両方かな。両方とも同じくらい——」

女は不意に、横を向いて涙を流したらしかった。それからまた俯いて、静かに、いくつかの滴を煌めかせた。

「帰るよ」

「もう少しいてほしい」

「だめだ。この先、なにが起こるかはだいたい想像がつく。私はそんなことは望んじやない」

「違うかもしれないのに……」

「違うさ」

私は立ち上がり、「困ったときは、訪ねてくるといい。真下に住んでる」と残してその場を去った。

普段、アルコールの類はあまり口にしなかったが、今日は、飲みたかった。上着を取りにも戻らず、寒風の中、女への苛立ちと憐憫を抱えたまま酒場を探し歩いた。風は、私の望むように、私を痛めつけてくれた。

息子は、幼稚園ではなく、保育園へ預けることになった。入園まで数日要し、初日にはぐずったりするかも知れないと心配していたが、これまで行っていた幼稚園のことでも思い出したのか、誰かとすぐに打ち解けようとはしなかったものの、すんなりと私の元を離れた。寂しさよりも安堵の方が大きかった。

一方、私の職探しはうまくいっていなかった。父の職歴を含めた過去を知らないということ、父の三十二という年齢、私自身が職を転々として何一つ極めなかったことなどが引かかっているように思う。唯一続いたあの職種は、この時代にはまだ存在していない。

私はこの時代で、いったい何ができるのだろう。職業安定所にはいくつも募集があった。誰にでもできそうな仕事もあった。だが、万人ができるとしても、私にはできない。万人が持っているだろう何かを、この心の中から欠落してしまっているのだ。おそらく、幼少期のとある日に。いや、最初から無かったのかもしれない。どちらにせよ、三十五にもなっているわたしに取り戻せるようなものではないと思う。

馬鹿らしい談笑や、見栄だらけのお飯事や、虚言だらけの社交や、人々との形式的な絆を得ようとまでは望まない。私はただ、静かな居場所が欲しかった。

だが、そんな考えは、通常では受け入れられない。だから、取り戻せなくても、得られなくても、私自身を変えられないだろうか、大切な息子のために、と思った。

明るかった。外はとても明るく、ベランダで吸う空気は清々しかった。冬と言えど、気持ちのよい朝はある。私は、この一日の始まりを喜び、啞えようとして取り出していた一本の煙草を、パッケージにしまい直し、しばらく外を眺めていた。眼前の世界を、灰色の

煙で汚したくなかった。

準備を終えたあと、息子に小さな鞆を持たせ、自転車の後ろに乗せる。ここから保育園までは、自転車で十分ほどだ。

保育園の門を越えて走っていく息子を見届けた後、担当の若い保母さんに会釈をして、様子をたずねた。

「どうですかね、あの子は、そろそろ仲のよい友達はできましたか？」

「それなりに馴染めてはいるんですが、他の子供たちと入園の時期がずれているのもう少しかかると思います。みんな、それなりに仲良くなっちゃっているので……」

「そうですか。でも、独りぼっちでなければ安心です。なんとか、よろしく頼みます」

「はい。その辺は任せてください。私は子供大好きですから！」

満面に笑みを浮かべて言った。その表情は素晴らしかったが、どこか頼りなくも見え、不安を抱かせた。

「あ、でも……」

「はい？」

「あの……」

「なんですか？」

「タカシ君、いたずらしようとしていたんですよ」

「あの子がですか？」

「はい」と頷いた。

意外だった。いや、私自身、静かに行く悪ふざけは好きな方だが、早くもその妙味に目覚めたのかと思うと、なんだか複雑な気分になった。子供のいたずら程度のものならいいのだが――。

「仲良くしたい感情の裏返しなんでしょうかね？ 昨日、お昼寝の時間、あの子は寝た振りをしていたみたいで、私が教室を空けると隣で寝ていた女の子に」

「え？ ちょっと、ちょっと待ってください」

「あ、いえ、そういう事じゃないので安心してください。マジック

で顔に落書きしようとしたんですよ。忘れ物をして取りに戻ったから止められましたが、あのまま私が戻らなかったら、あはは、あ、やだ、す、すみません。想像したらおかしくって。だって、きつと、うふふ」

「あの……」

私は困惑しながら相手の言葉を制した。

想像していたのだろう、屈託なく微笑んでいた彼女は、見る見るうちに顔を赤らめ、すみません！ と頭を下げた。

「いや、まあ、頭を上げてください。とりあえず、何事も起こらなかったように安心しましたが、まさか、あの子がそんなことをしようとしていたなんて」

「でも、基本的に元氣そうな子なので、大丈夫だと思います。周りの子はまだ子供ながらに警戒している程度だと思いますから、すぐ仲良くなると思います。私がきちんとやりますから、安心してください」

「お願いします」

不安はあるが、彼女に向かって軽く辞儀をした。

彼女の言うように、きつと、裏返しなのだろう。仲良くしたくて、構って欲しくていたずらをする。

私はそんなことは一度もしたことが無かった。むしろ、その孤独な観察者の哀れな行いを毛嫌いする側だ。度が過ぎて嫌われるような事にならないよう願う。

息子を保育園へ届けた後、私はいつも、一息つけるために喫茶店へ行く。私のいた時代にあったような、カフェと呼べるような小洒落た店は一つも見つからない。私にとって、店主もレトロなら、外装も内装もレトロだ。ゲームのできるテーブル筐体を使っている店もいくつかあった。

店には、くしゃくしゃのキャップを浅くかぶった、競馬と酒が好きそうな場違いの中年男がいつもと同じ席にいた。名は知らないが、常連だ。私より早く店にいて、私が席を立っても、彼はまだ帰らな

い。

テレビや、新聞記事で彼の氣に入ることがあると、いちいち店主の中年女に、「馬鹿な野郎だ!」「傑作だな!」「あほがまた一人減った!」などと言って同意を求めた。

店主はその度にはほえみ返すだけだった。そのときにできる皺のせいで、彼女の美貌は大きく加速して失われていったに違いない。

「ざまあねえな!」

彼は言った。

テレビからは芸能人の不倫ニュースが流れている。不倫された方が不倫した方、そのどちらに対して投げた言葉かはわからなかった。私とこの男は、顔を何度も合わしているのだから、そろそろ気安く話しかけてもいいだろうと考え、店主にホットコーヒーの注文をした後、「男か女のどちらです?」とさっきわいた疑問を投じた。

男は目を細めて私を凝視した後、表情を明るく一変させ、短くなつた煙草を指で挟みながらそれを一瞬、指揮棒のように振りあげ、ほくそ笑んで言う。

「どっちもに決まってるじゃねえか」

私は少し困惑したが、なぜそうなのか、ということが続けて訊く気にはならず、三度ほど軽く頷き、見せかけの理解を示した。

「なぜだかわかるか? ニイちゃん」

理解を示したつもりだったが、どうやら伝わっていなかったらしい。

「どっちもどっちということですか?」

少し考えて返答した。

「そうじゃねえ。それはそらの夫婦の話だ。お互い様ってな。だがいいつらは芸能人だ。俺たちに夢を与えてくれる。喜びを与えてくれる。ざまあねえってのはそう言うことだ。結婚したら、いつ別れるんだろうと考える楽しみをくれ、離婚したら万歳したくなるほどの感動をくれる。こいつ等の不幸な終着点は俺たちのように退屈な人間にとっての夢なんだよ」

「私もあなたと同類って事ですか？」

「なんだ？ 俺たちって言ったのが気に障ったのか？ ニイちゃんも仕事せずに朝からこんなところで時間つぶしてるじゃねえか」

言われてみればその通りだ。私の事情なんて知るはずがないのだし、求職中と言ったところで、毎日、何一つ変わらず、男と同じようにくつろいでいれば、それは当然、放埒者として映るに決まっていた。

「私は、あなたが思うより、もっと駄目な人間ですよ」

「ああ？ 駄目人間自慢でも始めようってのか？ この俺と」

卑屈を装ったのが裏目にでた。こういう人種こそ、ネガティブな自慢を繰り広げるものなかもしれない。

私は、コーヒークップに角砂糖を三つ入れ、くるくるとかき回した。

「俺はジョン・レノンさ！」

立ち上がった男は、こちらを見ながら、煙草の煙をパツと吐いた。

「そういうえば数日前に射殺されましたね」

「殺されたのは、良い方のジョン・レノンだ。俺には関係ねえ」

「やっぱり、ざまあねえな、と思ったんですか？」

この男がなぜ、自分を、それも善悪をつけてジョン・レノンと言ったのかは聞かなかった。

「思ったら何だ？ まさかそのちいせえ口で正義ぶって偉そうに説教たれるってえのか？」

「とんでもない」

「あのな、人生ってのはロシアンルーレットなんだ。ビルみてえにバカでかい拳銃が、あちこちで常に誰かの頭をぶち抜いてるんだ。

即死できなかったやつは、訳もわからないまま、なんで自分なんだ！ と嘆き、世を恨みながら死んでいく。浮気とはレベルが違うんだぜ？ これこそざまあみろってもんだろ。でかい存在であるほどありがてえ。でかいヤツが死んで、ちっぽけなやつが生き残る。もちろん、いずれは俺の頭にも弾は飛んでくるだろうよ。運だからだ。

だが、それまでは、叫び続けりゃいいのさ。ざまあねえってな！ちっぽけな野郎が、俺はジョン・レノンだと言うのは滑稽か？」

嫌らしい、ヘラヘラした笑いを浮かべながら訊いた。私は、煙草に火をつけ、ライターをテーブルに、パチリと音をさせて置き、「そう答えて欲しいのであれば」と返した。

男は、いちいち気取りやがって、と多少憤慨し、木製の椅子へ激しく身体を落とした。

いつもより早かったが、私は帰りたくなり、コーヒーカップを口元でぐっと傾けて一回で飲んだ。

「ごちそうさま」

店主に支払いを済ませて店を出た。男はずっと黙っていたので、私への興味はきつと、失せたのだらうと思う。

店を出たのがいつもより早いと言っても、三十分ほどだ。あの男は、自分の時計を見たときに勝ち誇るだろうか。だが、そんなことはどうでもよかった。とにかく、ペースが狂ったのだ。いつもならこのあと職安での仕事探しだが、気が乗らない。日雇いで日々をつなぐほど切迫していなかったから、私にはまだ余裕がある。それは父のおかげだ。浮気者のくせに、貯蓄だけはきっちりしていた。そのほとんどは葬儀なんかで消えてしまったが、それでも数ヶ月分の生活費は残った。

——誰だったか、私はこの女の名前を聞いたような気がするが、とにかく今、彼女が私の住処のドアの前に、上着もはおらずに座り込んで眠っている。抱えているのは、クリスマスの華やかさが描かれた包装紙にくるまれている、ティシューの箱くらいの大きさをした、何か。そういえば、もうじきクリスマスだった。息子に何かプレゼントしてやろうと考えたが、今はそれより、この女だ。

「おい、何やってるんだ。風邪ひくぞ」

見下ろすように、上から言葉を投げた。

女はゆっくり目を開けると、私の方は見ず、地面をぼうっと眺めている。

「寝たふりしてたのか？ どいてくれよ、部屋に入れない」

なおも動かず、ゆっくりと瞬きをする。

「どうして欲しいんだ。中へ入れればいいのか？」

どうせ、ゆっくりと頷くのだろう、と思っていたのだが、彼女は違った。

一気に立ち上がり、私に微笑んで見せ、「そう」と。

やられた、と思った。この女は小賢しい女だったのだ。怒鳴る前に骨を鳴らしていたあの行為で気づきそうなものなのに！

「駄目だ」

私はそう言ってやった。どちらにせよ、部屋へ入れる気はなかったからだ。ただ、憂えた表情が優しく、美しく見えていれば、もしくは、気が変わっていたかもしれない。

「なんでよ」

「駄目だからだ」

「これ、あなたへのプレゼントよ？ 気が早いけど。だから入れてよ」

「物でつるつもりなのか？」

「じゃあ体がよかったの？」

私は嘆息した。

鍵を差し込み、ドアを開け、「来いよ」と言った。

女はふふん、と笑ったが、私は「どうなっても知らないからな」と釘をさし、女を通してから鍵をかけた。

「いい部屋ね」

女はさっさと奥に行くなり感想を述べた。まるで、夫婦で物件を下見にきているかのようにして。と言っても、私にはそういう経験はないのだが。

「どこがいい部屋なんだ。君のところも似たようなものだろ。勝手にうちよろするな」

女の分まで靴を並べ直し、追いかける。

「食器、少ないのね」

女はキッチンにいた。家事ができることをアピールしているつもりなのかかもしれないが、こんなのは迷惑なだけだ。それに、今までを見ても、とうていまともな女とは思えない。だが、面白いとは思った。だから部屋へ入れた。断じて言えるのは、私がこの、寂しがり屋の女に情けをかけることは無いということだ。なぜなら、情を持ったその先にある破滅なんてものは、誰もが良く知っているに違いない面倒なことで、当然、忌避すべきものだからだ。気になるのは、演技かもしれない一々の所作を、この女はどこまで利用し、私に対して見せつけてくるのだろうかということであり、そのために色気が利用されるのなら、あるいは私は……。

「食事はどうしてるの？ 作れないならうちにくる？」

「ここで息子に食べさせてるものより、よほどうまく作れるのならな」

「嫌な人」

「君にそれしかないのなら、嫌なやつかもしれない。作ってもらえて喜ぶのは自分で飯の作れないやつか、若いやつだけさ」

「優しい人なら喜んでくれるわ」

「私にそれを期待するなよ」

「自分のこと、私って言うんだね」

女はじっと、真剣なまなざしで見つめてきた。私は思わず視線を外す。

「相手によるさ。君に対してはまだ、自分のことを俺と呼ぶような仲じゃないということだ」

「警戒してるんだ」

「君がそうさせる」

一步にじみ寄り、また私をじっと見る。身長差が生む、自然な上目遣い。この時の彼女の瞳は、無垢な子供のように輝いて、魅力的だった。

一瞬にして嫌われるのは簡単だ。ここで彼女の顔に唾を吐きかけてやればいい。そう、追い出したいのなら。

しかし私は、もう少しだけ、哀れなこの女を見ていたかった。強引であればあるほど、滑稽さは増す。私は一切、その心を受け入れはしないのだから。私には息子がいる。それで十分ではないか。

女は思い出したように振り返ると、居間へ行き、丸テーブルの上にあったプレゼントの箱を取り、私の元へ戻って、両手でそれを「はい」と言って差し出した。女の子らしい、可愛らしい仕草だった。「これを渡してどうしたいんだ」

「どうもしないわよ。ただ、クリスマスも近いし、渡す人もいないから」

「私が憎らしい返事をするのは、君のことが嫌いだからではない。それ以前の問題だ。わかるよな？ お互いの関係は不明瞭なんだぞ？」

なのに、勝手に部屋に押し入って、プレゼントまで渡す。ストーカーって言葉知ってるか？ まあ、知らないか。簡単に言えば、幸せというものをはき違えたまま、人を追いかけて迷惑をかけるヤツのことだ。君の幸せは必ずしも私の幸せではなく、迷惑になることもあるってね」

「迷惑なんだ」

「喜んでるように見えるのか？」

刹那、彼女の表情は哀切を漂わせ、徐々に沈みゆくその眼差しに、私は一瞬だけ戸惑ったが、それが演技であろうがなからうが、この先のことは黙って見届けようと思った。いや、そもそも、ここまで強引でしたたかな女が、自分の行為がどのようなものであるか、ということに全く理解が及ばないとは考えられない。わざわざスイッチを入れてから怒鳴るような女なのだ。漏れた感情を誤魔化しているわけではない。今も何かしら思索しているのだろう。そして、もしかすると、私からの拒絶こそが、彼女の望んでいるものではないか、というような気がした。ならば、いま、再び、私は聞こう。

「君の名前はなんだったか。忘れてしまったんだ。もう一度教えてくれないか」

彼女は、ほんの少し、私の方を目だけで見ようとしてはたとやめ、またゆっくりと視線を沈め、顔を背けた。そうして、小さく、唇を唇でかみしめ、俯いたままじっと目を閉じたあと、悲しげにひらき、プレゼントを私の隅にそっとおいて、私から離れた。帰るのだと思った。だが、彼女は少し行って逡巡した。心が孤独を望んでも、その孤独を片隅で恐れているかのようにして。

惚れた女なら、私はここで後ろから抱きしめ謝ったのかも知れない。だが、彼女は、ドアの前を占拠し、プレゼントで気を引いて部屋へ上がりこみ、料理を作ってあげようかなどと一方的に、そう、一方的に先走っていただけだ。抱きしめる理由はなかった。そして、私が部屋へ上げようが上げまいが、結局、彼女は孤独を望み、孤独を恐れただろう。彼女の周りには、視界には、最初から人などどこにもいなかったのだ。

——なぜ、私はこんな時に、彼女の名前を思い出してしまったのだろう。

だが、私はその名を呼ばず、彼女が帰るのを待った。こちらを振

り返ってもらいたくなかったのだ。

視界の右端に積まれている段ボールの上に、しまい忘れたらしい携帯電話を見つけていた。この時代の者が見たところで、光沢を帯びる黒いそれに、不思議な、未来的なフォルムと感じようとも、それが正に未来の物であるとは思わないだろうが、触れられるのは避けたかった。掌大のその小さな存在感が、人をひきつける可能性は十分にあるからだ。電源は切つてある。ボタンを長押しするという概念もないかもしれない。電源ボタンのマークの意味すら分からないはずだ。だが、私の近くにいた人間は、これを見れば絶対に尋ねてくるだろう。

「これは何ですか？」と。

もちろん、もっともらしい答えを用意しておけばいいだけだが、今はまだない。だから彼女がそのまま消えるのを待った。

ドアがひとりでに閉まる音は、とても小さかった。

私は深く吐息し、携帯電話をとる。液晶画面に、私の疲れて見える表情が、微かに映った。

この電話、私が単にしまい忘れただけなのだろうか、それとも息子がおもちゃと勘違いして取り出したのだろうか。言えるのは、息子の身長はこの高さまでは届かないだろうということだ。

私は携帯電話をポケットにしまい、なるべくひっそりと持ち歩くことにした。充電のことを考えて、電源はなるべく入れないが、たまには時計がわりに確認するかも知れない。その時に、メールが来たりなんかすれば面白いと思う。

ふ、とプレゼントの箱が目に入った。誰の手にも渡らなかったそれは、背中を向けていたときの彼女の横顔と同じような寂しさがある。これを開ければ、彼女を受け入れたことになるのだろうか。これを返せば、彼女を侮辱したことになってしまふのだろうか。かと言って、このまま放置しておくわけにも、捨てるわけにもいかない。

本当に面倒な物を置いていつてくれたものだ。私は明日、彼女へ返すことにした。

あれが楽しかった、これが楽しかった、誰々ちゃんがどうした、先生がどうした。一日の出来事を、夕食の時に報告してくれる息子は、テレビよりも私の顔を見てくれるようになった。二人の一日が、笑顔で始まり、それは途切れず、笑顔で終わるようになったのだ。家での食事の時間を、いままで生きてきた中で、一番楽しい時間だと思うようになった。息子の手を取ったり、私の右手を見せたりし、「箸はこうやって持つんだよ」と教える余裕さえできたのだ。息子は少しも嫌がらなかった。

ところで、あの女はどうなったかと言うと、あの日の翌日、部屋へ行ったが留守だったので、帰ってきそうな頃合いを見計らい、ベランダから表を窺っていたのだが、遠くに見えた彼女の隣には、背の高い男がいた。

なるほど。これで良いのだ、こんなものなのだ、と思ったが、プレゼントは返さず、捨てず、開けてもいない。クリスマスを過ぎてから、中を見るつもりだった。

四歳の時のクリスマスをどのように過ごしたか、私には全く記憶がなかったが、きっと家族で祝っていただろう。彩られて賑やかな街と、テレビからの情報、そして安定していた暮らしからの推測だが、私も同じように息子を喜ばせてやることにする。だから、あえて息子にも聞かず、一緒にいるときはクリスマスの情報を避けた。すべては、息子の無邪気な笑顔のため、喜びのため。生活のすべてをそれに捧げている。いったい、この気持ちは何なのだろうか。彼は、真のところ、息子ではなく、私自身であるというのに。だから私は、本当の意味での、家族への愛を知らない。しかし、それはあまり重要なことではなかった。

さて、私は私の人生から、私に起こった大抵の、比較的大きな出来事を記憶している。例えば、小学五年生の時に、虫垂炎で入院、

手術をしたし、中学二年生の時には、体育の授業時に、サッカーボールが目直撃して安静のために入院した。バイクの免許を取ってからは、一人で峠を走り、原付でも単車でも、大怪我はなかったがよくこけた。二十歳までは大まかに言っただけのような出来事があった人生だった。彼女ができたのは、高校一年生の時だ。付き合い方もよく分からず、やがて連絡も取らず、自然消滅として終わったのだと思う。

では、息子はいったい、どこまで私と同じ道を歩むのだろうか。性格はすでに、まるで別人のようであると感じるが、運命が生命の誕生とともに内に宿るのなら、いや……、私と、ここにいるもう一人の私が違う道を歩んでいるのだ。病気や怪我だけが運命というわけでもなからう。この事について考えるのは、自分と顔の似ている人間を捜すのと同じように馬鹿げたことなのかもしれない。

私はただ、ときおり自分の人生と比べながら、息子の成長を喜べばいい。私の人生を変えること、息子の人生を変えること、それが、私がここに一番の理由なのだから。

息子を保育所へ送り届け、喫茶店で時間をつぶし、仕事探しを先延ばしにして帰宅すると、しばらく後にチャイムが鳴った。

覗き穴から確認すると、マイコだった。去り際に思いだした彼女の名だ。あれから数日もたっているのに、今さら何の用があるのか、といささか億劫な気持ちになったが、ドアを少しだけ開いた。

「なんだ。まだ用があるのか？」

マイコは昔の不良娘がテレビで見せるような、ふてくされた、拗ねたような表情をそのまま浮かべ、「忘れてたプレゼントを返して」と言った。

「悪いな。開けてしまったよ」と私は嘘をつく。

「じゃあ、あたしの気持ちを受け取ってくれたってことよね」

マイコから、空気がやわらかくなったような、悟られないように気をつけたらしいほんの少しの笑顔が見て取れた。

私は、悪いことをしてしまったという気になり、「そうだ」としか言えなかった。もちろん、数秒の間をおいた後は「でも、男ができたんだろ」と聞いたが。

「いないわよ」

「背の高いやつと歩いていた」

「あれはお客さん」

「お客をわざわざ部屋へ連れ込むなんて、君はいったいどんな商売をしているんだ。全く想像ができないな」

「何だって良いでしょ」

「だめだ。言わないのならもう帰ってくれ。これ以上、いや、この先、二度と話すこともない」

私は、あの男を、新しくできた彼氏だと思っていた。だから、偽りとはいえ、彼女を思いやったつもりだった。その結果、嫌らしい男に成り下がっているのかも知れない。男女の関係なんてものは、いつも誤解だらけだ。だから、今はどう思われようとも構わなかった。あの男が、本当にお客なのかどうかは私にはわからないし、どうでもいいことだ。それに、今はもう、マイコのことを興味を持って面白いと思うこともなくなっているのだから、彼女の嫌がるであろう質問で、彼女を遠ざけるのみだった。見え透いた嘘などつかずに、彼氏と仲良くやればいいのだ。今の私には、自分と息子の生活しか頭にないのだから――。

マイコは俯いて黙っていた。何を考えているのかは知らないが、嘆息を後回しにしてドアを閉め、鍵をかけてから背を冷たい鉄にゆっくりと預け、そうしてここで息を深くはいた。扉の向こうで、彼女は何かを呟いたらしかったが、私には、それが何の言葉なのかまではわからなかった。いや、わからない振りをしたただけだ。彼女はもう、このアパートから居なくなるのだろう。胸にざらついたような違和と重さを感じ、触れると、煙草の箱がポケットに入ったままだった。私はそれを上から握りつぶした。握りつぶしてすぐ、ドアを開けた。マイコがそこに居ることは、鳴らない足音で何となく分

かっていたが、優しくはできない。色男なら、私の胸のすぐ前にある、俯いたままの彼女の顔を、頭を、そっと抱きしめるように包んでやるのかもしれないが、私は愚かな男だ。

「煙草が切れたから買いに行く。ついて来たいなら、勝手にするといい」と言った。

マイコはついて来た。左を二歩後ろ。一言も話さず、ちらと見るとやはり俯いたまま。

しばらく行ったところで、「君はいったいどうしたいんだ」と聞いた。

「好きなの」

「寒いな。上着を忘れてしまった」

「好きなの」

「寒くないのか？ 君も上着を着ていない」

「やっぱり嫌い」

「煙草を買ったら、昼には少し早いが、一緒に食事でもどうだ。暖かいところで、温かいものを食べよう」

「ウソ。やっぱり好き」

マイコが、どのような表情だったかはわからないが、最初から感じていたとおり、面倒な女、というのやはり間違いではなかった。性格は相変わらずだが、面倒は加速しているようにも思える。このまま進むと、さらに厄介なことになるだろう。最初は、不思議な人間だと思って興味を持ったし、面白がっていたが、これ以上、彼女の気持ちをもてあそぶのは、下衆のやることだ。微塵であろうとも同情など示すべきではなかった。お前がいまのぼったのは、脚の足らない錆びた脚立だ！ とでも言ってくれないものだろうか。

「ホープ二つ」と財布から紙幣を取り出しながら煙草屋の老婆に告げる。

「セブンスター」

「君も吸うのか」

「悪い？」

「気付かなかったが、イメージには合ってる」

「なによそれ」

「言葉のとおりさ」

灰皿が備え付けられてある煙草屋だったので、その場で一本くわえ、火をつけた。空はまぶしいが、太陽は軟弱だ。

マイコも煙草を吹かした。煙を吐く姿が、やさぐれた女として映る。風にふわりと舞う、肩にかかるくらいの黒い髪、憂えた瞳、荒れのない小さな手、控えめな赤の唇、この時代らしい古くさい化粧ではあったが、こうやって眺め、初めて、マイコを退廃的で美しいと思った。

「未来をどう思う」となんとなしに聞く。

「なんの？」

「世界と君の」

マイコは少し笑った。意味が分からなかったのかもしれない。

「さあ」

「実は私は未来から来たんだ、と言ったらどうする」

「信じる」

今度は私が少し笑った。

「お腹、すいてるのか？」

「うん。でも、どこでもいい」

面倒な返答だ。

私は二十代前半の頃、そう言った女を試したことがあった。知人の紹介で会った女だ。その女が、なんとなしに「どこでもいい」と言ったのか、それとも私を試したのかは知らないが、私はその女を試した。昼間から酒を飲んでいるような男たちが集まる酒場に連れて行ったのだ。大抵の男たちは真っ黒い顔をしていて、前歯のどこかが抜けていた。私は当時、それを彼らの勲章として認めていた。連れてこられた女は、当然のように怪訝な表情を浮かべ、入店を躊躇

踏した。安っぽい店構え、どこからでも入れる、四枚の、光沢のないスチール製の戸、赤い暖簾の隙間からうかがえる、中にいる男たちの異様な空気。女は怒った。嫌だと言って。じゃあ、君は帰ればいい、と私だけ入店し、一人で飲んだ。飲みながら、いつか、自分の前歯をへし折るのもいいだろう、と考えたりもした。女からはその後、当然連絡は来なかったし、こちらからもしなかった。知人は呆れ、やがて彼からも連絡はなくなった。

マイコはどうだろう。そういう店を見つけ、連れていったところで、おそらくは順応すると思う。それに、彼女をこれ以上試すのは酷なことに違いない。用意した脚立は、やはり脚が足らず、錆びているのだ。私は転落するだろう。

「なにが好きなんだ？ 嫌いなものでもいい」

「軽いもの。お昼前だし」

素っ気のない口調だ。

「スパゲティは？」

「ナポリタンなら」

十分だろ、と思った。未来ほどこされたメニューなんかここにはないのだし。

煙草を灰皿に潰し、「寒いのは大丈夫か？」と聞く。すると、マイコは私の左にくつついてきた。細い右腕が、私の左腕に絡み、心が触れた。

「これなら我慢できる」

私はそれを無言で受け入れ、駅前まで歩くことにした。

男女の関係というものは、実に奇妙なものだ。何がどうなるか、相手が言い寄ってくるのなら、それはピンボールのように予測ができない。若さで輝く銀の球であるマイコに対し、あっちへ行けと私は何度も弾いた。けれども、上にある他の穴には収まらず、夜のネオンを楽しむように、あっちへふらふらこっちへふらふら、光の中を駆けまわり、一身に浴び、そして、美しさを実感させるかのよう

に反射させ、キノコバンパーに弾かれ加速し、また舞い戻ってくる。私は幾度となく弾いたが、やがて彼女は、アウトレーンから、するりと懐へ入り込んだのだ。通常なら、入られたところで、次のゲームを何度でもできる。もう一度、プランジャーへ乗せて弾き出せばいい。いずれは上方の穴へ放り込んでおさらばできることだろう。高得点だ。しかし、私はそれをしなかった。最初は、頭がおかしい阿婆擦れだと軽蔑していたのに、今では隣にすることを受け入れた。惚れたのかはわからない。ただ、哀れだとは何度も思った。だから、私が離れるべきだった。もう一度やるのではなく、プレーそのものをやめて、遊技場で暇そうにしている誰かと交代すればよかった。マイコなら、それでも良かっただろう、認めただろうと、今でも思うのだ。私と息子の世界に、マイコはどこまで入り込んでくるつもりだろうか。「こんにちはタカちゃん」と言われ、息子がそれを喜ぶのなら、私は三人の世界を作ること望むのかも知れない。しかし、孤独を本質とする人間は少なからず居り、マイコはその性質を、もはや隠すこともなく、一部では露悪的に見せつけてきた。孤独を宿し、根元に置く生は、周囲を引っ掻き回して困惑させる。しかし、自ら孤独へ向かい、孤独を抱擁する者は、ただ静かに、周囲へと微笑みを与えることができる。私がそれを、マイコに対して見せられていたのなら、彼女はきっと、最初から近寄ってくることもなかっただろう。世界を隔絶するあの表情は、息子の前で包帯をほどいた時に、一緒に剥がれてしまったのだ。私は、息子を幸せにすることを望むが、マイコに対してはわからない。彼女を幸せにできるだろうか。

今、彼女は、私の隣で落ち着いた。だが、どこことなく、不安そうでもある。彼女から伝わる温もりは優しかったが、私の体温は、マイコの心を凍えさせるかも知れない。いや、マイコ自身がそれを望んでいるのだ。数ヶ月くらいなら、そのために、共に暮らす事もあり得るだろう。彼女は何者なのか、私はまだ知らないが、マイコの持つ良い部分を見つけられたのなら、その度に、彼女の孤独を信じ

てやれるはずだ。そして、私はそのために手を振ろう。出来れば、
息子を私の隣において。

息子の成長を、柱に傷を付けて記録するようなことはしていなかった。別に、柱の人面のような波紋が気に入っているわけではない。身体的なものなら、できあがった姿がここにある、というだけだ。それなりに身長があつて、それなりの体型をした男。髪だってまだ問題はない。もちろん、私と息子とは、育っている環境、食べているものが違うのだから、遺伝的な影響を除外するとすれば、全く違う体格に育つこともあるのかもしれない。今、息子は私の腹部へ体当たりをしてきた。頭がようやく胸元の下へ届こうかという程度の身長で、まだまだ非力だが、あと二三年もすれば、私は吹き飛ばされてしまうような気がする。小学五年生になっている息子は、不良の一手手前のような存在として成長しており、私に対してはまだ、身体を先刻のようにぶつけてくる程度だが、外では所謂、腕白を拗らせたような立ち位置らしく、喧嘩やサボタージュといった問題をよく起こし、私が学校まで呼び出されることもあった。だが、午後六時の門限を破ったことは一度もない。息子は、私には信じられない道を歩んでいた。なぜなら、私の小学生時代はとても大人しいもので、女子生徒から「好きを逆から言うത്？」と聞かれ、その答えを思い浮かべ、顔を真赤にしていたくらいなのだから。それが、いったい、何を切っ掛けに道を踏み外しだしてしまったのだろう。甘やかしすぎたり、厳しすぎたりはしなかった。礼儀や、人の心、正しい道を教えていたし、遊びにも連れていった。欲しがる物は、理由を聞き、結果的に欲しがった回数の中分くらいにはなるよう与えてやった。勉強に関しても、あまりうるさくは言わず、わからないことがあれば教えてやったし、テストで六十点以下を取ることも今までではなかったから、それでいいと思っていた。不思議なのは、不良の道を進もうとしていながら、当時の私と違って、読書を進んでやっていることだった。母の遺品はまだ難しいのか、息子が読んで

いるのは、買ってとねだられた児童書ばかりだが、中には、その内容をほぼ丸々暗記したものもあった。暗記に関しては、私も単語帳を片手に、クラスの昆虫博士への対抗心から、ありとあらゆる名前を覚えたものだ。だが、生体に関してはこれっぽっちも勉強しなかった。丸い眼鏡の昆虫博士にはついぞ勝つことはできなかった。浅はかさと敗北を悟ったと同時に、専門家というのはどこかおかしい、とも学んだ。私が歩んできた人生の形跡は、もはや子育てには有用ではないらしい。私の過去は、私だけの思い出としてしまっておくべきなのかも知れない。私は少し、残念な気持ちになった。すでに通った保育園、学校が、私の人生のそれと違うとは言え、私の思い出の樹から、小さな思い出を少しずつ綿のように紡ぎ出し、息子の人生の光に照らし合わせたかったのだ。そのことで、私の人生の変革を如実なものとして受け止めたかった。徐々に変わっていく息子の人生を望んでいた。息子の生を否定しているわけではないが、あまりにも違いすぎる。どこかで私と同じような部分を見せてくれると信じていた。だから、今も、今までも、息子を大切に育ててきたのだ。私は勝手だろうか。いや、これこそが私の当初からの目的だった。もう、私と同じ道の片鱗を見せることもないのだろう。私が父になったとき、全てが流されたのだ。今はまだいい。生活は安穩として、日々に幸せも楽しみもあったからだ。だが、このままだをそれ、さらにそのまま反抗期を迎えるのなら、私は父としてではなく、男として、息子と向かい合うことになるだろう。実質的には四十歳である私が、肉体的に対峙することができるとは考えていないが、再び孤独を抱擁し、その世界の一端を息子に触れさせることによって、決然と対抗しよう。ひとつ言うならば、私はそんなことを心底から望んでいるわけではない。これは、同じ人物でありながら、別々の人生を歩む者同士、それを知る者に与えられる必然的な戦いなのだ。自分の人生を変えることを願った男からの、一方的な果たし状を――。今、私は、私の人生のほうが正しい形だったのではないか、とすら考えていた。それは、私自身の肯定にほかなら

ない。

——私は相変わらず、職を転々としていた。社会的には三十八歳になっている。これでは駄目だ、未来がないと分かっている、目の前で行われる不正や、理不尽なことに対して、それを看過できるような性格は持ち合わせていなかった。いや、それを理由にして自由を欲していただけでも知れない。半年ほど、職場で口うるさく働いては辞め、二ヶ月ほどのんびりしながら職を探し、また同じようにして辞める。息子が擦れていく原因は、私にあるのではないだろうか、と考えたことはない。家のことで心配をかけたり、苦勞をさせるようなこともしていないからだ。洗濯、掃除、炊事の全てを一人でやっている。子供のうちは、子供らしく遊び、それなりに勉強をしていればいい。だが、人に迷惑をかけることは違う。それは何度も教えたことだ。今、息子は道を踏み外そうとしている。私はそれを阻止できない。息子が仕事のことを察知し、それを氣にとめている節もない。だから原因が分からないのだ。思い当たる答えを見つけたとき、人は、俯いていた顔を少し上向けるのだろうか。今の私が正にそれだった。原因がこの家庭ではないとすると、友人、悪友の影響だと思ったのだ。私が中学生だった頃、校長先生の推薦で、美術の学校へ進んだ近所の同級生がいた。絵を見たことはなかったが、推薦されたことで、彼の才能は大したものなのだろうと考えていたし、将来は画家として決まったに違いないとも思った。しかし、彼は落ちぶれ、学校を辞め、暴走族になり、夜に吠えていた。どうやら、バイク免許の合宿で知りあった男たちが、彼を誑かしたらしい。その後、年をとって、彼は歯抜けの仲間となり、幸せそうなの、日に焼けた浅黒い笑顔を見せていた。加えて今になって思うのは、悪友の影響もあったのだろうが、彼には元々、才能なんてなかったのではなからうか、ということだ。だから、逃げるように、鬱憤を晴らすように、暴走族へと流れ、別の居場所を作った。だが、彼は幸福そうだった。絵画の世界から逃げきった安堵か、それとも本来の道がそこだったのかは分からない。人はいずれ辿りつくべき

ところに辿り付くというのならば、すべての人の存在は同様に正しい。では、息子は私と同じところへ辿り付くだろうか。私はそのようには思わない。人生には、取り戻せないものがあるのだ。いくら後悔しようと、もはやどうにもならない、修復しようのないものがあるのだ。一つの過ちがすべてを壊す。それが自然に修復されることなどない。壊れたものは塵となり、掬っても掬っても指の合間から流れ落ちてゆく。そして、人は誰しも、幾条垂れる滝の糸のような銀砂に、寂寞の美を感じるものだ。

お相撲さんごっこに息子が飽きると、息子は次の遊びとして、私にとっては非常に懐かしいファミコンをセットし、テレビと向かい合って座った。スーパーマリオブラザーズというソフトが数週間ほど前に発売され、人生において、私の時間をどれだけゲームに奪われたかはわからないが、楽しい思いをしたということの方が強く印象にあったから、一緒にディスカウントストアまで買いに行ったのだ。学校で、友人らから話は聞いていたらしいが、最初、息子は少し遊ぶと、つまらなそうにして投げた。操作がうまく行かず、何度もゲームオーバーになってイライラしているのだとわかった私は、素直な子供の可愛らしさに微笑し、貸してごらんとコントローラーを取り、一人でプレーした。そうして、大人気ないことではあったが、これまでゲームで遊んできた年季の違いを、テレビ画面内を華麗に踊り回るキャラクターで魅せてやったのだ。息子はやがて食い入った。きつと、テレビのヒーローのような存在がそこにあるように感じたことだろう。派手さはなかったが、動きがスムーズで華麗だったのだ。息子は、やる、と一言言って、私からコントローラーを欲しがり、そこからどっぷりとゲームにハマるようになってしまったが、もちろん、「ゲームは一日一時間」という某名人の言葉を借りてしっかりと制限しているから、友達が来た時以外は一時間以上やらせることはない。不良の道へ進むくらいなら、ゲームの制限を少し、緩めてやってもいいだろうが。いや、それは、責任の放棄となりはしないだろうか。私はしっかりと、息子と向かい合い、父

子の関係を以て、人の生き方を教えてやらねばならないのだ。子を成長させるとは、なんと面倒なことだろう。しかし、世の中の親は、いったいどうしてこんな面倒なことをやっているのか。自然な形だからだとしても、一部の金持ちは面倒を家政婦に預ける。一般家庭でも、教育のために学校へやる。確かに、成長する姿を見届け、過去を思い、今を喜ぶことは、とても素晴らしいことだ。一喜一憂、感情の起伏というものは、人生に彩りを添える。だが、波は読めない。津波のように突如として襲いかかり、全てをのみ込んでしまうこともある。これは、その未知への挑戦なのだろうか――。そうだ、私も人も、相違などなかった。私は、紛れもなく、あの子の父なのだ。全てを、「愛」の一言で片付けるのならそれでも良いが、私はその愛の横に、「臍^{ほぞ}」という言葉添えようと思う。これは、きっと、私だけに許されたものだろう。

未知、と私は言った。何も知らない、わからない、ということだ。未知がもたらす、いくつかの大きな出来事をとらえて、人はそれを運命と言いたがる。私も同様だった。馬鹿げたことだとも思っていた。運命が、幸であれ不幸であれ、私達はそれを受け入れるしかない。しかし、果たして運命は、本当に抗えないものなのだろうか。そして、結果論とも言える運命は、孤独ではないか、と思うのだ。全てが過去のものとして生き、人を未来へ繋ぐことはできても、人の未来を決定して彩ることはない。予測は、人や自分が与えた束の間の夢だからだ。多くは、希望的な錯覚だ。過去が生み出す幻影だ。「私は、私の人生を変えたのだ」という、未知への嘲笑を自分自身へ送れるだろうか――。この先、私はすでに見た、いくつもの夢に縋らなければならない。錯覚を否定してはならない。でなければ、私の心はきつと、この世界から消えてしまうだろう。だが、私の運命が、私の運命に抗い、道を分かち時、私は、人生のすべてを理解できるような気がする。息子は、夏休みの前に、盲腸の手術をした。病気や怪我だけが運命というわけでもなからう、と私は言った。しかし、現に、息子のこの出来事を見て、私は分からなくなっていた

のだ。私の運命が、私の運命に抗うということは、何も、この私と、息子の運命の拮抗だけを現しているわけではない。予測は無限にある。人の運命であれば、結果は一つだ。だが、私はその一つの結果に対して、運命自身が叛逆できるのではないか、と考えていた。私にとってそれは、とても難解なことではあつたが、感覚として、運命の叛逆を受け入れることができそうなのだ。今はまだ、漠然として輪郭もつかめず、頭を悩ませるばかりだが、いずれ、そう、もう一人の私、息子の成長によって、なんらかの答えを見つけられるような気がしていた。息子と私の差異は、きっとヒントになってくれることだろう。もちろん、両者を比べるだけなら、簡単な答えはあと数年も過ぎせば出てくるはずだ。自分自身の運命に対する叛逆には、それすらも運命であるというような帰結は避けたい。なぜなら、全てが結果論であらうとも、その運命が、運命に対する叛逆の結果であるということも十分に考えられるからだ。内在するいくつかの運命と、表出し、結果となる運命――。小さな私は、これからどこへ向かうのだろうか。盲腸で入院したとき、私の場合は、隣に住んでいたおばさんが、漫画本を数冊お見舞いとして持ってきてくれた。そのことはしっかりと覚えていて、タイトルも、内容も忘れていない。息子の場合には、先生がお見舞いに来てくれた。差し入れられたものは同じ漫画本だった。この奇妙な一致は、ただ流行からだと考えることができた。未来と比較して、漫画のことがよくわからないこの時代の大人なら、書店員に聞くだろうし、聞かずとも、売れているものなら平積みされていたり、目立つところに置かれていて、それを手に取るはずだ。つまり、無難な選択なのだ。だから私は、別で購入したものを、子供のうちに読んでおいてもらいたいのを、積み重ねてある漫画の上に、気づかれないよう置いた。これも、私の挑戦の一つなのだろう。

階上で、何かを打ち付ける音がした。時おり、一日のうち数回、そういうやかましい音が響いてくる。マイコだ。私はもう慣れてしまったから、様子を見に行くこともない。一人で、勝手に、私はこ

ここにいるんだ！ と小さな世界で訴えているだけだ。……マイコとは、今まで何事もなかった。私は、関係ができてしまうのなら、それも仕方が無いと思っていたが、彼女は望まなかったのだ。結局、すぐに、孤独が彼女を支配した。私はそれを、アパートの階段で、蹲るようにして座る彼女を見て理解した。私は黙って通り過ぎた。足を掴まれたら転ぶかも知れないと思ったが、マイコは腕の隙間に顔をうずめたままだった。私との接点は、その時でなくなったと考えていいかも知れない。その後、今はもう亡くなってしまった、管理人だったあの弱々しい老人の相手をしたり、若い男や、酔っ払いなんかを、取っかえ引っかえ連れ込んでいたようだが、新しい場所を探すこともなく、そして今は独り身のようだ。そんな時はやかましかった。あれから五年経っているが、彼女はこれからも同じことを繰り返すのだろう。職に関する適性の無さは、私も全く変わっていないのだが――。

マイコは女だから、この時代なら尚更、独りで生きていくのは厳しい。孤独を宿していようと、結婚願望はあるに違いない。うまくいくかは別として。あのような、人を翻弄し困惑させる人間なのだから、どのような男であれ、しばらくもすれば恐らく辟易するだろう。鬱陶しくて、疲弊して、厭になるのだ。彼女に必要なのは、愛などではなく、介護人だった。二十四時間労働のできる、気のいい介護人だ。マイコの身体の見える部分には、孤独の印はなかった。だが、比較的初期に、孤独者であるかの判別の出来る、一つの方法がある。それは、この五年の間に気づいた方法だ。それを早くから知っていれば、マイコとはそれほど口をきかずに済んでいただろう。冷たいと言われようと、私は翻弄され、同情しかけたのだ。同情など示してしまえば、彼女は、私の心の中に棲み着いたかも知れない。同情は、人を見下し、その人を、自分自身へ縛り付ける行為にほかならない。だから、関わりを持ってしまった時、その瞬間から沈黙すればよかった。黙っていれば、孤独者であるかどうかはすぐに分かる。「変な人」と言ったり、気味悪がったり、とにかくその

場から去って行くなら相手は正常だ。なぜか自分のことを語りだしたら、残念、当たりだ。責任をもって付き添ってあげなければならぬ。

また、音がした。四回連続。今度は大きかった。しかし、事故を思わせるようなものではなく、やはり、孤独から生じたものだと思えた。天井がもう少し低ければ、私は上へ向かってノックを返しただろうか。見上げてみると、薄そうな合板だったので、聞こえるように力を入れて叩けば、板が割れてしまうかも知れない。ついにて天井も割れて、彼女がそれで落ちてくれば瞬間は面白いが、あとで請求される修理費で、私はくらくらくと目眩がしてしまうことだろう。どれほど強い音が繰り返されようとも、彼女の悲劇に付き合うことも、付き合う気もなかった。誰かを呼びたくてたまらないのか、深夜に強く音を鳴らすこともあったが、音が響きやすい時間帯のため、私が何かをするまでもなく、他の住人から注意されて終わった。マイコのことをよく知らない住人――、恐らく女達にとっては、マイコはただの迷惑な人間でしかなかったということだろう。面倒とは少し違うはずだ。そして、誰も、音に対する不満以外には、彼女に對しての関心を示さなかった。追い出したいとか、新しい管理人に強く苦情を言うだとか、そういったことは一切なかった。いや、実際はあったのかもしれない。だが、今もマイコが居続けていることから、排除の可能性までは想像できなかったのだ。会う以前、いったいどれくらい前から上に住んでいるのかは知らない。彼女はこれから変わらず、一年後も二年後も、階上で音を鳴らし続けるのだろう。せめて、もう少し軽やかで、穏やかな旋律であつたなら――。

10 (後書き)

台詞らしい台詞はありません。

電話が鳴った。面接に落ちた知らせだった。面接官の見せた、軽蔑するような、口の曲がった顔を思い出した。私がこの一ヶ月ほどで何度落ちたかは、もう覚えていない。嫌味を言われた数なら、十回程度だろうか。もしかしたらそれ以上かも知れない。私はここへきて、自分自身が情けなくてたまらなかった。近隣の仕事は殆どあった。近所では私のことを、不採用のエリートと、ニヤニヤしながら噂していることだろう。いや、それは考えすぎだろうか。なんにせよ、エリートなら、表情を変えずに泰然としているべきだ。無職のエリート、落第のエリート。私以外にもきつという。彼らは、どこへ辿り着いただろう。陽を遮る橋の下、それとも、陽の当たるアーケードの下か。

仕事は見つかりそうにない。だが、仕事一つで転落させられるような、脆弱な人生は御免だ。転落は、悪辣な叛逆者によってもたらせられるべきで、それによってのみ、転落を受容できる。ある人は、あるいは世界を、あるいは自分を、厳しく呪うだろう。だが、叛逆者による転落は、人を魅了するほどの美をまもっているのだ。時に笑われようとも、じっと中空を睨めばいい。その眼差しも、きっと美しいはずだ。

しかし、こうも一気に仕事にありつけなくなってしまうものだろうか。仕事を辞めてからは、まだたったの二ヶ月しか経っていないのだ。それで世の中の就職事情がガラリと変わるとは思えない。恐らく、受からない理由としては、最近の私の表情が原因かもしれない。なかった。自分でも理解していることだが、虚ろなのだ。黄ばんだ目で卵のような腫れぼったい上下のまぶたに、小さく切れ目を入れたかのように、眠そうな目玉がのぞいている。さぞ不気味なことだろう。しかしこれは、薬の類などではなく、寝不足が重なったものだ。仕事を辞めて、いつもなら二ヶ月ほどはのんびりと暮らしていた。

だが、今回は違った。辞めて一ヶ月ほどして、父が、正しくは私の祖父が、どうやってかこの居場所を突き止め、電話で連絡を取ってきた。親戚連中から逃げおおせたと思っていたが、とうとう見つけられてしまったということだ。そして、それすら望まなかったが、なんとか電話でのやりとりで済ませていた。祖父は祖母を連れてこへ来ることを望んでいるのだ。それが私に取って、一番の悩みの種だった。顔を合わせれば、呆けてでもない限り、即座に別人と見抜かれるだろう。私は悩んだ。来ないよう、やりとりを電話のみで引き伸ばそうとした。頭を抱え、眠れなくなった。今まで、不眠症のようなものを味わったことのなかった私は、夜の怖さを知った。数日で顔に疲労が現れた。今まで見たことのない表情だった。それでも、さすがに無職でいられないことくらいは理解していたので、職を探したのだ。このまま見つからないのなら、それはそれで、最悪、言い訳はなんとでもなるかも知れないが、やはり、この顔だけは無理だ。表情が虚ろであろうがなかりうが、そんなものは何の意味もない。何の誤魔化しにもならない。私は眠れぬ夜を受け入れようと、両親を受け入れるつもりは微塵もなかった。このまま電話で済まし、それを不満として訪問してきたところで、居留守を使うだけだ。道ですれ違ったところで、私を分かるはずもないだろし。

だが、不安を一気に押し広げたのが、息子の、「おじいちゃんに会いたい」という一言だった。私の電話を聞いているうちに、話を理解してしまっただけで、両親が亡くなったというような嘘は今までついていなかったが、話題には一切してこなかった。会いたいと言いつつ可能性があったし、会ったところで当然、いい結果を生むはずもないからだ。快活になった息子は、数年ぶりの再開を喜ぶかもしれないが、果たしてどれほど覚えているのだろう。最後に会ったのは、葬儀の時だ。あの時、息子はまだ静かでおとなしかった。私の小さかった頃、葬儀の時に話した記憶はなかったが、未来の世界ではまだ二人は生きている。いや、未来はいま二〇一六年だから、もしかしていると死んでいるのかも知れないが、少なくとも、私が

ここへ来るまでは、至って問題なく健康に暮らしていたはずだ。

「二〇一六年か――」

私は思わず呟いた。

いったい、今の未来、私の居たあの世界はどうなっているだろう。平和だろうか。さらなる科学的進歩を遂げているだろうか。漫画にあるような不老不死だとか、機械人間のような存在は現れているだろうか。まだ、たったの六年だ。世界が激変することはそうそうないかも知れない。だが、描いてしまう。夢見てしまう。私は、この時代ではもう、夢見ることができないのだから――。既知というのは、一方で恐ろしく、つまらなく、寂しいものなのかも知れない。私はポケットから、いつも大切に持ち歩いている携帯電話を取り出し、本当に久しぶりに電源を入れた。液晶画面に起動時のアニメーションが踊り、音がやんだあと、カレンダーが映った。この時代の年月もわからない馬鹿な携帯電話だ。もちろん、設定してやればいいだけののだが。少し、電話帳を開いてみた。仕事関係で付き合いのあった名前や、結婚後に疎遠になった友人らの名前、誰なのかもわからない名前、記号で登録されている謎の電話番号――。私はそれらを見て、思い出に浸ろうとしたが、感慨など、何もわかなかった。電池切れの音になる。まるで私の心情を察したかのように。私は、やはり、自分が望んだように、こちらに居るべきなのだろう。

呼び鈴が鳴った。ドアの向こうにいるのは、私の実の両親だ。私の息子も、そのことを知っている。鳴ってすぐ、息子は表情をぱっと明るく変え、飛び出すように迎えに行った。私は、電源を入れていないテレビに映る自分を、じっと眺めていた。数日前までの虚ろな表情ではない、毅然とした眼差しだった。風鈴が、一度だけ揺れて音を奏でた。

玄関で、両親の喜ぶ声、そして、息子のはしゃぐ声がした。数年ぶりであるのに、なぜ息子は人見知りの素振りも見せず、打ち解けているのだろう。どこかで誰かに、祖父母相手には笑顔を見せてや

ればいい、とでも教わったのだろうか。それとも、息子なりに考えた結果なのだろうか。

暑い暑いと言いながら、どたどたと廊下を歩いてくる。居間へ入ってきたところで、私の左、三人が視界に入った。仕方無しに振り向いて見せる。

「疲れたろう」

私は、なんとか口元で笑ってそう言った。

母が大きく息を吐きながら、畳の上に紙袋を置いた。身体は小さいが、随分と若い。五十代中頃だろうか。髪は染めているのか、肩元まで黒く光っていた。

母より先に、父が私を凝として眺めている。表情はとても険しい。明らかに疑念をいだいているのがわかる。私は父を視界の隅に置くしかできなかった。

「ビデオ、ちよつといいか」

私を外へと促す。返事はせずに立ち上がり、あとへ続く。私より背も高く、六十近い老齢を微塵も感じさせないような、がっしりとした体躯だった。未来では、その身体も随分と衰えてはいたが、階段を降りてアパートの前まで出た。

「葬儀の時から、そうか、もう六年か」

「あの時は、事故のショックでまともな対応もできなかった」

「ほれ」

と私に煙草を差し出した。私が吸っているものと同じ銘柄だ。ゆっくりと啜え、自分で火をつける。

「ほう、煙草吸うようになったのか」

「人は変わるよ。主義も嗜好も表情さえも」
父も煙を吐いた。

「暑いな」

「なら、部屋に戻ろうか」

「いいや、駄目だ。ここがいい」

煙草を吸う時の自分の指が、小さく震えていることに気がついた。

「せっかく暑い中をやって来たというのに、なんで外で」

「お前は誰だ」

「誰だとは？ あんたの息子じゃないか。呆けたのか？」

「違う。お前は別人だ。親が息子の顔を忘れるわけがない。なぜ孫と暮らしている。なにが目的だ」

「おいおい、やめてくれよ。事故で記憶は無くしたが、あんたの息子だよ。顔は怪我をしたんだ」

私は、こんな猿芝居が通用するとは思っていない。通過儀礼のようなものだ。指は震えているが、この流れはどうに覚悟していた。だから堂々と煙草も受け取った。

「おかしいと思っていたが、私の息子はあの事故で死んでいたんだな？ お前が入れ替わったのか」

「映画の観すぎじゃないか？ 入れ替わるなんてことができるわけがない。第一、リスクが大きすぎる」

「だから目的を聞いているんだ」

この流れを覚悟していると言ったが、目の前にいる父が押し隠す、恐怖と動揺までは想像していなかった。父は今、私に対して恐怖をいだいているように見えたのだ。

「そうだ。そうだな……」

私は不敵に微笑した。なぜなら、バレたところで、父にはどうすることもできないと悟ったからだ。騒げば騒ぐほど、世間からはただの気狂いとして捉えられることだろう。そうだ。私に秘められた事実は、なんの足枷にもならなかった。私はこのままで居れば良いのだ。

「どう言えば、爺さん、あんたは納得するのかな？」

「何だその偉そうな態度は！」

殴られると思ったが、胸ぐらをつかまれただけだった。やりあえば、負ける気がする。相手には気迫があった。

「いきなり胸ぐらを掴むなんて、あんたどうかしてるぞ」

殴られようが殴られまいが、私の勝ちは確定した。まさかこんな

るとは全く思ってもいなかったのだ。喜びに打ち震える。哄笑だ。勝ち誇った笑いを見せつけてやりたかったが、後の祝杯まで取っておく。

父は手を離れた。私はわざとらしく襟元を正したが、その間も父に視線を送り続けた。

「なあ爺さん、あんたはどうしたいんだ。私はすでにあの子と六年も暮らしている。真面目に育ててきた。ちょっと道は踏み外しそうだが、それでも、だ。あんたはその生活を壊したいのか？ 私たちは、これでもずっと幸せだったんだぞ？ 誰にも迷惑をかけてもないんだ。あんたが私を別人だとのたまえばのたまうほど、あんたは惨めにも笑いの種にしかなくなる」

「やはり、別人なんだな？」

「さあね。あんたがそう思うなら、そうかも知れないな」

「息子はどこだ」

「私じゃあ不満なのか？」

嘆息して聞く。別人だと認めたようなものだが、問題ない。

「どこにいる」

「確実に言えることは、私の関与の有無にかかわらず、あの事故で生き延びることはできなかったということだ。残念ではあるが」

「勝手なことを言うな。お前が！ お前が殺したのか！」

おっと、まただ、この爺さん、なかなか直情的だな、ともちろん内心で笑う。

「落ち着けよ。騒げば騒ぐほど自分が滑稽になるだけだぞ。そもそも、あんたはどうしたいんだよ」

父は煙草を地面へ放り、踏みつぶした。

「わからん。なんにもわからん」

「私の顔に面影はないか？ あんたの息子のだ」

私なりに情けをかけたつもりだった。

父が私の顔をじっと眺める。

「一つだけ教えられることがある。私は、あなたのことを知ってい

る」

「復讐か」

「なんでそうなるんだ。私の望みは、息子と二人で、今の静かな暮らしを続けていくことだ。誰かを不幸にしようとか、陥れようとか、そういうのには興味もない。だから、あんたにも迷惑をかけない」

父は目を見てきた。私は嘘をついていないのだから、じっと見つめ返した。これが演技なら、重要な場面であるのに、照れてしまっているかも知れない。

「不幸にはしない。絶対に」

父は、二本目の煙草に火をつけた。

「お前が誰だか、なんとなくわかったような気がする」

「それはきつと、正解ではない。世の中には、極稀に、本当に理解しがたいことが起こる。それを受け入れるには、ある程度の耐性と理解が必要だ。――帰りたいと思うことが時折ある。時代を二度体験することは、味気ないものだからだ。だが、私には息子がいる。私は、彼の人生を良いものとしてやりたい。そのためにここにいる」

父は、煙を吐きながら首を振った。

「尋常じゃないくらいに薄気味悪いが、お前は悪人ではなさそうだが、きちんと正体だけは明かしてもらおう。宇宙人であろうが何であろうが、お前の口から、言葉を聞きたい」

私は、それも尤もだと思い、小さく頷いた。それくらいはしておくべきなのだ。真摯な態度を示さなくてはならない。

「私は、あなたの孫、タカシです。事故に会い、二〇一〇年からなぜかこの時代へやって来た。それも、両親の事故の直前に。私は二人を助けようとした。でも無理だった。助からないことも知っていた。だから、自分自身で、自分自身を育てようと思いました」

父は、当然というべきか、失笑した。馬鹿馬鹿しい話だと思ったかも知れない。耳を軽くほじっている。

「理解できない」

「かまいません。息子との静かな暮らしを許してもらえるのなら」

「それも無理だ。お前こそ、映画の観すぎだったな」

私はポケットを探り、携帯電話を取り出した。すぐにバッテリーが切れてしまうだろうが、電源を入れ、父に向けて写真を撮り、その画像を見せた。

「こんなカメラが、この時代にありますか？」

電源はすぐに落ちた。

「よくできた玩具だ」

「玩具じゃありません。デジタルカメラです。この時代では、電池を充電する方法がないから、すぐに使えなくなるだけです」

自分に機械工学の技能があれば、と少し悔やんだ。

「ああ、わかった、わかった。好きにしろ。お前は悪いやつじゃない。それもなんとなくわかった。だが、孫には質問させてもらう。

その返答次第だ」

それも尤もだ、と再び思い、私は承諾した。

部屋では、二人が麦茶と菓子を口にしながら談笑していた。私たちが戻ったのに気づくと、母が麦茶を注いでくれた。無駄に熱くなった身体を、その茶がよく冷やしてくれた。父は、自然にあの質問の出来る機会が来るまで、のんびりと接するつもりなのだろう。

私は、母がなぜ私に違和感を覚えないのか疑問だった。未来でも毫碌せず元気で暮らしている。父のみが気づき、母が気づかないということとは考えられなかった。

私は母をじっと見た。麦茶を飲むときも、菓子を食べる時も、見続けた。だが、私の視線を意に介することもなく、母は孫をかわいがったり、父と会話をするだけで、私へはあまり注意をやらない。意識して避けているというふうでもない。これはいったいどういう事なのだろう。

「なあ、母さん」

呼び方がいまいちよくわからず、照れときこちなさで不自然な表情を浮かべてしまったかも知れないが、かまわない。

「なに？」

私を見た。が、私に対する疑念など一切ない、とても自然な顔だった。

「いや、やっぱりあとでいい」

「なによ」

私は父へと顔をむけた。父も私を見ていた。私は立ち上がり、父を池のある公園へと誘った。

外の熱気は相変わらずだったが、しばらく歩くと、心地よい風が横から何度か流れた。しばらく黙ったまま行き、なんとなく取り出した煙草に火をつけたことで、話す切っ掛けができたような気がした。

「なあ、あの人はなぜ気づかないんだ」

「呆けだな。わからなかったのか」

「そんなはずはない。未来ではあんたら二人はいたって元気だ。不幸の報せなんて一切なかった。それに、まだあの若さじゃないか」

「未来のことなぞ知らん。徐々にだが、確実に呆けは進行している。そうなってるんだからなってるんだ」

私は信じられなかった。

「私のせいなのか？」

「なにがだ」

私は、瞬間、漠然とだが、気づいてしまった。私が及ぼした母への影響を。

「私が来たことで、あの人の人生を変えてしまった」

「知らんと言ってるだろう」

親戚に預けられた私は、何度もこの二人に会っていた。構ってもらったのだ。祖父母にとって、孫が身近にいることは喜びだったのだろう。私はそれを取り上げてしまった。二人を孤独にってしまった。意図せず彼らの人生を変えてしまった。

孫に会えた喜びのあまり、私のことを忘れてしまったのかも知れない。目に入らなかったのかも知れない。真のところはどうでもない。

い。私はただ、申し訳なかった。

「静かに暮らしたかった。そして、私の人生、いや、息子の人生を変えてやりたかった。それだけだったのに――」

「変えたきゃ勝手に変えろ。結果なんて誰にも分からん」

「私は知っているんだよ」

「それはお前の中でだろう！ 現実はどうなんだ！」

「現実……」

そう呟き、微苦笑した。

私の居た未来は、もはや夢なのだろうか。私はなぜ、ここに居るのだろう。なぜ、来てしまったのだろう。

あの事故の時、私が入れ替わろうとしなければ、あの人は助かっていたのかもしれない。いや、状況的にその可能性はなかったはずだ。

あれほど強く、息子との幸せだけを望んでいたのに、痴呆のことを聞かされ、未来を変わず生きるべきだった人の、人生を潰した罪の意識を重く感じていた。マイコに対しては……。

――私は、息子に関わるべきではなかったのではないか。いや、そうではなく、ほんの少しでよかったのかも知れない。そう考えるのは、ただの自己擁護だろうか。

人は、いつも勝利者によって導かれてきた。私も同じなのだ。だが、それに気づかなかった。私は勝利者によってここへ運ばれて来たのだ。強大な者に対する、微小な者の勝利。私は、このことを充分に喜び、感謝をせねばならない。私の願いは、私が願うよりも前に、勝利者によって叶えられていた。なんと不思議なことだろう。もはや、何ものも必要でない。これ以上の望みもない。犠牲はあったが、私の人生は完結したのだ。私は、いつか未来へ帰ることができると漠然と思っていた。それが、本来ある、正しい姿だと考えていたからだ。正しくなければ、これは夢だとも考える。だが、完結していた。私の役目など、最初からなかった。望んだ、父としての存在も、そして過ごしてきた数年間さえも、戯れに過ぎなかった。

私はただ、従わされたのだ。この、小さな勝利者は、なんと傲慢で、ひねくれ者であることだろう。私がこの完結に気づくまで、私を笑って眺めていたのだから。それは、動乱のない、平和だった時間が証明している。勝利者は、私で安穩と娯楽したのだ。

ありがとう、と心で感謝した。

父に、用事を思い出したと言って別れを告げ、一人で池へと向かった。木製の、腰丈ほどの柵で外周を囲われ、太陽の照りつける中、いくつもの人が柵に体重を預け、澄んだ水面を見ていた。茶色い鴨が、ぶかぶかと浮いている。親子だと思った。風が水面に波紋を呼んだ。私はそれをしばらく眺め、携帯電話を取り出した。暗い液晶の部分に映る、自分の顔を笑ったあと、視線をまた池へと向けた。鴨の親子は、変わらず静かにたゆたっている。私は、携帯電話を強く握り締め、勝利者への、形を持った感謝のしるしとして、池へと向かって投げた。遠くに投げたつもりなのに、驚いた親子の鴨が、別々の方へと羽を広げて飛んでいった。

>了<

11（後書き）

というわけで完結です。

息子の反抗とか、和解とかも書きたかったのですが、薄っぺらい感動をイメージして避けたのかなんなのか、こんな結末と相成りました。

読んでくださってありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3177p/>

臍（ほぞ）

2011年11月4日03時14分発行